

FF9 観光日記

祝子 紀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

FF9の世界を観光したり、買い食いしたり、いろいろ巡ったり、見たりした。

目次

日記の始まりが書かれている…

番外編：検証実験その1	36
第10話	33
第9話	30
第8話	27
第7話	23
第6話	20
第5話	17
第4話	13
第3話	9
第2話	6
第1話	1

第1話	44
第2話	49
第3話	52
第4話	56
第5話	60
第6話	64
第7話	69
第8話	74
第9話	77
第10話	80
第11話	83
第12話	86
第13話	90

第33話	140
第32話	137
第31話	133
番外編：突発的 事故の結果3	127
番外編：突発的 事故の結果2	121
番外編：突発的 事故の結果1	114
第30話	111
第29話	108
第28話	105
第27話	102
第26話	99
第25話	96
第24話	93

第37話	152
第36話	149
第35話	146
第34話	143

日記の始まりが書かれている…

第1話

記録を付けようと考えた。自分が確かにこの世界に存在していると確認するために。

始まりは何だったのだろうか？

この日記を見た私以外の君は唐突に失礼だがFF9というゲームを御存じだろうか？

知らない人はいいのだが、知っているならば歓迎と共にいろいろと話をしたいものだ。

主に故郷について

数ヶ月前（正確には四か月と半月ほど前）に遡るのだが詳しい話は追々、日記に記していこうと思う。

一ヶ月目は混乱と共に時代の把握と自身のスペックの確認と衣食住の確保に必死だったと思う。

なんせ本当に信じられない話であるが目が覚めたら吐瀉物特有のすえた臭いのする

トレノの路地裏で無防備に寝ころんでいたのである。(よく寝ていたところを泥棒や酔っ払いに襲われなかったのは幸運だった思う)

目が覚める前の記憶については学び舎に赴き、友人たちが下らない話をして盛り上がるそばでいつも通り読書に夢中だった日常に送ったと覚えている。

読書に夢中だった平穏な日常が遠い。

慌てて起き上がり路地裏を抜け出しつつ(背後でゲエゲエと誰かがまだ吐いている音が聞こえたのを不思議と覚えてる)、カバンの中やポケットの中を確認すると入っていたのは本当にわずかばかりの硬貨十数枚(一円玉から五百円玉まで結構あった)、読み返していた小説の文庫本が数十冊(置き勉強だったので教科書はロッカーに入れっぱなし)、筆記用具とノート六冊(今書いている日記帳はこっちで購入したもの)がカバンの中身でポケットには携帯電話^{スマホ}だけであった。

路地裏を出た先は運よく見覚えのあるマップで犬っぽい生き物がこの数ヶ月(正確には四か月と半月以下略)で見慣れたモーグリと追いかけてを繰り返す場所であった。

その時はじめて自分がこの世界のトレノの自分がいると気付いただからあの光景は

印象に残っている。

気づいた事実にも動揺しつつも持っていた持ち物を売ってこちらの服と護身用としての武器を手に入れたあの時の自分はえらいとほめてみる（いい成績をとった時に褒めてくれた両親はこちらにはいないのだから自分で褒めるしかないのだ私は虚しい）。

生憎と小説はこちらの文字でないため買取を断られたが故郷の硬貨はこちらでは精巧な出来で珍しいコインとして高値で引き取ってくれたし、足元を見られず低く買取せずに適正価格としてギル相場を覚えてくれたり、小説のほうは塔に住んでいる変わり者の学者先生に見せたらどうだとアドバイスもくれた。

いい装備を揃えられたし、その日の宿も教えてくれたナイト家の店番さんは優しい人だった。

この時、驚きの連続であったためそれほど気にも留めていなかったがナイト家の店番さんは物珍しく精巧な異国のコインを持った変な服を着た人物によく丁寧に対応してくれたものだとおもう（たぶんいつも相對している客または腕試しの旅人にしては不審者だが騒ぎ立てるものじゃないからのものだという考えが私は近いと思う）。

教えられた宿屋に赴きその日は鍵を閉めると同時にベッドに崩れ落ちる形で眠りについた。

朝起きた時に夢であつたと家族に笑いながら挨拶できることと信じていた。それが私の始まりの日であつた。

ザアザアと風に合わせて草が揺れて草原独特の草の香りが鼻をくすぐる。本日の天気はとても良い。

太陽は真上にあり時間帯は正午頃だろうか。

草原のど真ん中で野宿キャンブのための見張りをしてくれるモーグリも呼び出さず、無防備にも寝ころんでいた私はむっくりと起き上がり背についた草きれを払いながら大きく伸びをした。

カチャカチャと音を立てて、数か月前（正確には四か月以下略）から相棒となつてから使い込んだ二本の突剣レイピアが腰で揺れる。枕代わりに折りたたんだくたびれた感じの羽ペンがささった日に焼けてやや色あせて朱色にも見える紅い婦人帽を丁寧にしわを伸ばして被り直す。

「空……綺麗だね」

起き抜けの第一声にしてはあまりにも間抜けで極まりない能天気なことを呟いた私

である。

場所はアレクサンドリアにほど近い川のそばの草原である。

第2話

朝起きるたびに現実を見るのがつらい。そう思ったことは誰であれ経験しているだろう。

トレノの宿屋で目覚めた朝は気分的に最悪であった。

目覚め自体は爽快そのものだったが本当に気分の問題であった。

携帯電話^{スマホ}に登録しているアラームが鳴り、すぐさま起き上がると変わることのない窓辺の光景は心に余裕のある時にはきれいに映っただろう。

眠らない街トレノの名に違わず、キラキラと貴族街と呼ばれている建物やからの明かりがステンドグラス風の窓を通り越し色とりどりの宝石のように水面に光を落として
いる。

スタジアムからの帰り客たちは様々な亜人種でいっぱい、華やかな夜の街にふさわしいパレードのようであった。

自分が知っている情報では味わえない本場ならではの窓辺での景色は心を多少上昇

させるに足るものであった（同時に今後のことを思うと心に影が落ちるが）。

あの時の自分でできることと言えば情報収集を行うことくらいで有力な情報源と言え、トレノでは変わり者の学者先生と言われているトット先生とアレクサンドリアの図書館と大陸を渡った先のマダイン・サリの文献といったところだろうか。

日記を書いていて今であればまた別であるのだが…悔やんでいてもしょうがない。

異大陸に位置するマダイン・サリは遠すぎるし、アレクサンドリア城の図書館は仮にも城の中に入るのだから誰かに紹介状を書いてもらう必要があるし、今いるトレノで学者先生から情報収集とアレクサンドリア城の図書館へ入るための紹介状を書いてもらうことを今後の目標に定めたのがこの時である。

宿として泊まった雑居区の酒場2階から塔への道すがら四本腕の男にぶつかって財布をスラれてたり（用心して買ったゆつたりした服のあちこちにしまったおいたギル硬貨は無事だった）、空のダミー財布を取り返すためぶつかってきた男追いかけたり（「しつこすぎるぞアンタ〜！」と最後には泣きが入っていた）と大変だった。

スラれたダミー用の財布を取り返した後、ようやく塔についた時には比較的明るかつ

た双月がさらにこうこうと夜道を照らすほどであった（トレノは極夜の街だからと言ってしまえばそれまでだが）。

塔の中へ通じる扉をたたいてみたがすぐには返事がなく、仕方なく出直すかと踵を返した時にとぼとぼと道を歩く特徴的な髭の背の低いおじさまが目に入った。

これをチャンスと思ひ話しかけてみるとやはりお目当ての学者先生であつたトツト先生であつた。

第3話

時間がある時は周りを顧みることが出来る。あの時の私にはないものだが…。

トレノでのトット先生との会話は実に有意義なものであった。

簡単な自己紹介を済ませた後に「立ち話もなんですので中へどうぞ。」と言われて案内されたトット家で、見本用として手渡した文庫本数冊に目を通したトット先生は「この字体は…今まで見たことも…。」ぶつぶつと何やらつぶやくと古い語学辞書を取り出した。

その後、暫くこちらを振り返ることなく夢中で何やら文章を指で追いながら、メモであろうか、故郷では珍しい羊皮紙に何やら書きだし始めた（これは時間がかかりそうだとその場に放置されていた論文に無断ではあるが目を通していたなんせ暇だったのだ）。

1時間ほどたった後にこちらに向き直り客人を放置していたことに対する謝罪とこ

れと同じ言語で書かれた書籍があるのであればぜひ買い取りたいと穏やかだが興奮冷めやらむ早口でこちらの目を見るオジサマは好奇心にあふれた少年のようであった。

「こちらの語学のどれにも当てはまらない未知の言語です。」

「文字の種類だけでも三種の組み合わせで規則性も独特なため難解な言語で、挿絵も美しく一冊だけでも貴重な文献だけでなく、美術的な観点でも興味深い代物ですな。」

トット先生は「ですが」沈んだ様子でこちらに残念そうな無念もあらわな語調でさらにこう告げた。

「わたくしはひと月ほど前に職を急に辞職させられてしまい持ち合わせがないのです。」

それは私にとってとんでもない価値を持つ情報であった。

「わたくしのパトロンとなった貴族にもこの書籍に見合った金額が出せますかどうか……」

悩んだ様子のトット先生に対して私は口述筆記で良ければ件の書籍を訳すのに手伝いがしたいと申し出た。

驚いた様子でこちらを見るトット先生は「よいのですか？こちらとして大変ありがたい申し出なのですが……。」迷いが見える口調であったが、私も少し事情がありましたと話

したのはこちらのからきて私の行動だ。

私が話したの故郷から唐突に空間でも移動したかのようにこちら来てから路地裏に倒れていたこととか帰る為に空間を移動する方法について何か知らないかとか支離滅裂でありながらも私についてのすべてをトット先生に告解するかのように話した。

泣きたくもないのにいつの間にか話している最中だというのに涙が止まらなかった。グズグズと吃逆上げすることもなくただ涙がこぼれるまま淡々と告げた。

今にして思えば、いろいろと限界だったのだ。

私の話を聞き終えたトット先生は痛ましいものを見るようにこちらを見るとゆつくりと首を横に振るところ告げた。

「残念ですが、歴史を紐解いてもあなた以上に特殊な経歴の人物はおりません。ましてや、わたくしの知る限りではありませんがレッドローズにある最新鋭のテレポットと同じ空間移動の魔法であつても再現は難しいものと思われまます。」

と正直に告げてくれた。

第4話

嘆いていても仕方ないなら現実から目をそらすな。

真実は時として人を傷つけるが、優しいウソなら良いなどまやかしの言葉だ。

その点ではトット先生は真摯に私と向き合ってくれた。

あの時は声もなく呆然と泣いていた私であつたが、頭の中は冷静に今後の予定を組み上げようと必死であつた。

思考が止まれば迷いが生まれてしまい、そうなると人生は楽しくもなんともなくなる。

服の袖で涙を強引にふき取り、かける言葉を失つた様子の子のトット先生に向き直つた。

正直にそして真摯に私の現状を見極めてくださつたことにまずは礼を述べ、書籍つい

ては金銭の支払いは要らず献本の形で私が持つ数十冊の小説すべてお譲りし翻訳も手
伝うこと、その代わりしばらくトレノを活動拠点とするのでどこかただで泊まれる場所
を提供してくれないかと提案をした。

提案を述べた私にトット先生は先ほどまで涙を流して赤く腫れて醜くなったであろ
う私の顔を見ながら「お強いですな」とこぼした。

強いという意味は精神的にであろうか、だとしたら勘違いだ。

あきらめたら帰る手段を探してくれるような奇特な方が現れるわけでもなし。

もはや根性と意地である時は私は何が何でも生きて故郷に帰ることを決めたのだか
ら。

「あなたのトレノでの拠点のことなのですが」

「どうでしょうかここで書生として暮らしてみませんか？」

「あなたのように強い意志を持つ御仁であればこの不夜の街であつても滅多な事は起こ
りません」

そのありがたいトット先生の申し出にうなずいた私は一つこう聞いた。

「教授とお呼びしてもいいですか？」

唐突な私の呼び名にトット先生は「ホッホッホ…構いませんよ。ですが」その私の言葉にふと疑問を持った様子で「何故、わたくしの貴方様からの呼び名が教授なのですか？他の皆様は私を学者先生やトット先生と呼ぶので参考までにお聞きしたいのですが？」と尋ねてきた。

不思議そうにこちらに尋ねてきたトット先生に私は持っていたカバンの中からノートと筆記用具の中から万年筆を取り出しそこに故郷の文字の一つ漢字でこう書いて見せた。

教えを授けてくれるで 教授 きょうじゆ と…。

これがトット教授が最初に意味を知った故郷の文字の一種、漢字である。

アレクサンドリア城下町へと通じる門をくぐり長期滞在の予約を入れていた宿への道すがら、西側の空に様々な種類の赤色を身に纏いながらお日様が薄い雲越しに沈んでいく。

朱、^{アカ}紅、^{アカ}赫と連想する漢字を日記に綴ることを考えながら、ふと、トレノでの生活が2か月を過ぎたころの奇妙な出会いを思い出す。

あの見事な赤毛の高潔な武人は元気にしているだろうかと…。

第5話

トレノでの日々は実に充実したものであった。思わぬ災難にもあったが……。

宿を引き払いお世話になるトット家に荷物の運び入れをおこなったり。（本当に少量の荷物であったため、後にトット教授から生活必需品を買い足すための費用を用意しようかと打診されたりもした。その後、きちんと断りを入れ自分のギルで買い足したのだが。）

書生になったことでトット教授のパトロンであるビショップ氏に教授と共に茶会に呼ばれたりした。（一見さんお断りの会員制のオープンカフェのカルド・カルタで邂逅、貴族だから最初は様付で読んでいたのだが将来性のある君には様付でなくてもよいと言われたが良いのだろうか？まあ敬語関係について私は甘い部分があるのでありがたいお話だが。）

正直に言えば、お偉いさんのお茶会はどんなおいしいお菓子でも緊張で味が分からなくなるものだ。後日、ビショップ家が営む合成屋の店番君の休日と一緒にお茶をしながらと誘いナイト・ティーを楽しんだ。（クアッド・ミストの話で盛り上がった。）

こちらに來た時には試せなかつた白黒魔法両方に対しての適性があつたことが判明したり。(見せかけの護身用として購入した二本の突劍^{レイピア}が、それぞれ白魔法と黒魔法を宿していたようだが、スリ取られたダミー財布を取り返すときに無意識に引き出して立体機動のような動きで使つてスリを追いかけていたと一部のトレノ住民が目撃したようだ)

白魔法はヘイスト、レビテト、フェイスで黒魔法はスロウ、ストップ、グラビデと時間と重力関係に偏りを見せた初期魔法だ。鉄板のケアル系や四属性攻撃魔法じゃないのが気になるが原因は解らずじまいでせいぜい分かつたのは武器の名前がそれぞれ白魔法のがエペプリズム、黒魔法のがグピティー・アガという程度であつた。

「無意識であつても多重無詠唱で引き出される魔力量はどんな優秀な魔導士であつても下手すると魔力^M切れを超えた枯渇でミイラ状態になるはずですぞ」と言われてその後トット教授との会話にゾツとしたが

「それだけMP切れが来ないほどの魔力量とは魔導士としては将来有望ですな」と言われた。私には争いごとに巻き込まれそうな嫌な予感がするので早急に強くならねば。

話を変えよう、こちらではやはり武器防具アクセサリー等に宿る素養を引き出し慣らすことでアビリティを身に着けるのが主流らしい。(職業^{ジョブ}ごとに経験を積んで覚えると
いった形とは違うみたいだ。)

そういえば、トット教授が「まるで誰かによつて能力を引き出せる武器に合わせて職業が先天性に決められているみたいですね」と問いかけられたが私のまるで星が決めた運命みたいだという返しに深く考え込んだ様子であった。

少し返しがロマンチックすぎただろうか？

トレノに来てから半月がたったころには口述筆記のための作業も落ち着きをみせて、私用のために時間が取れるようになった。

そのため、私用の時間を利用してある場所に赴いてみた。

トレノよりも奥の森を越えた先のクワン洞へと…。

第6話

故郷にいたころには自身の周りが恵まれていたという感覚は特になかったが。違う環境に放り出されると日常のありがたみにやつと気づくものだ。

その日は久々の休日に早起きをして早朝呼ばれる時間帯（常にテラ月やガイア月に照らされているので時間間隔がなくなりそうになる為気を付けなければならない。）に街を出た。

町を離れること30分ほど経った頃に夜空からさんさんと太陽降り注ぐ昼に変わった森の中でカーヴスパイダーやトリックスパロー、マンドラゴラに何度か出くわした。数は一体だったり二体だったりしたがそれほど苦戦もせずあっさり倒すことができた。遠目に見えた瞬間にグラビデで鈍ったところを突剣レイピアで大きく狙いやすい胴体を切り付けるか頭を貫くことで倒していった。マンドラゴラが三体以上の時は安全に倒せる自信がないのでさすがに逃げたが。

戦闘能力を安全に鍛えるためにキング家のオークションで書生として働いていた約2週間分の時間給で買い取った装備品は質が良く、パールルージュで覚えた沈黙回避の

術は金切り声を防ぎ、装備品のマダインの指輪はマンドラゴラのブリザラを吸収した。

グラビデで削った分のライフいがぐり3連続は回復に持ってきた初級傷薬《ポーション》を反射的に使わなかったらさすがに死ぬかと思ったが、オートポーシオンは一人で行動している分には有用なアビリティであった。

やはり事前の情報とは違い実戦に出てみないと判らなかつたことが多く、その一つとしてアクセサリの複数装備が可能であったことが一番の収穫だ。

アクセサリーの組み合わせによつては属性吸収・半減・無効などの効果を打ち消しあつてしまうが、基礎能力を加算することは可能であり、パールルージュとマダインの指輪、金のチョーカーなどは同時複数装備が可能で能力が大幅に上昇した。

装備する際に回避や防御行動の邪魔にならない程度というのがネックだが。

そうこうしている内に森を抜けて目的のクワン洞にたどり着いたころにはお昼手前のことであつた。

入り口からの明かりでクワン洞内部は比較的明るく足場も安定しているようにみえるので安心して目的を遂げられそうであつた。

「おや、珍しいアルな。この辺りに人が来るのは迷子アルか？」

クワン洞入り口から近い位置の木々の間からガサガサと音を立てて十字の目にナマズのような髭が生えたク族が現れて話しかけられた時は正直驚いた。

心構えをしたとはいえ初めてまともに亜人種と接触したのは初めてであったから余計にだ。

挨拶をしようと口を開くよりも先に腹の音があたりに響き渡ったグオルウルウウ、ギウルウリと音は風の音には紛れてくれず彼（だろうかもしくは彼女）の耳に届いたのだろう。「わっははは」と声を立てて笑われてしまった。

「お腹すいてるみたいだから洞窟の中に入るアルよ。ワタシここに住んでるから一緒に食事にするアルね。」

「話はそれからアルね」と言われてしまった。

第7話

本当に分かって欲しい事なんて他者に伝えるのは難しいモノだ。

料理に関しては私は人並みにできる。

それは自分が知っている食材や道具、環境が整っていることが前提条件に挙げられる。

キャンプのように長時間、薪の面倒を見つつ料理を作るといった技能は持ち合わせていないので、今回は市場で購入した固い歯ごたえのある（そういえば聞こえがいいが実際は酵母がまだ発見、否使われていないだけなのだろうか？）黒パンを2つに切ったもの。

新鮮なギザール野菜の葉っぱの部分（ギザール野菜は葉は人参の葉に似た味で根の部分はカブに似ていた為、市場で手に入れた馴染みの味がする調味料で作ったピクルス液に余った根の部分を漬けてみたらちよつと嗅いだだけでも気絶しそうな涙目必須の物凄く臭いがしたが味は美味しかった）

（ギザール野菜のピクルスはやはり強烈な臭いを何とかできないかと手作りしたマヨ

ネーズに刻んで入れてタルタルソースにしてみましたらそれほど気にはならなくなったのだが素の状態では納豆やクサヤよりも強烈である。）

(これを素で丸ごと一気食いた某堅物騎士をちよつと尊敬しそうだ)

厚みのある上物のベーコンとチーズ(酒場で倒れた酔っぱらいの介抱をしたら寝落ちしてしまったのでその客が注文した品をお詫びとして店主がタダで包んでくれた)

それらを大きなサンドイッチにして2つに切ったものを持ってきたのだが、途中で食べちゃってしまい(シャキリとしたギザザル野菜の葉と軽くあぶったベーコンの肉汁と解けたチーズが手作りタルタルソースの酸味と黒パン独特の菌ごたえがマッチしてとっても食いがある美味しさだった)午前中につけるだろうとみともしも甘く保存食もろくに持ってこなかったのもその時にクワンさんに出会わなかったらどうなっていたことか。

こちらの材料に関してはまだ不慣れな部分がある私はレシピ集を購入して保存食について読もうにも、やはり文字が単語が読み取れはしても文章として読み取るにはまだ未熟な部分がある。

口述筆記をトット教授に願い出たのはこれが原因であった。

あの時、目を通した論文も所々に意味は解る単語は認識できるのだが、文章となるとまるで意味が解らないのが問題だった。

こちらの文字の学習面に関してもトット教授にあちらの文字との比較時に読み解く形での学習でしか機会がないためなのが痛いのがこれ以上トット教授に負担をかけたくない。

もちろんトット教授のことだから、素直に教えを請えば快くこちらの文字を教えてくれるだろう。だが、ただでさえ書生としておいてもらっているのだ彼の教え子が文字も読めない未熟者がなぜいるのかということが言われるのが私は怖いのだ。

それが原因で私がこちらに來た経緯を誰かに調べられたら、もしキング家の関係者に知られたらと思うと、そしてそれが彼の耳に入ってしまったら恐ろしくてたまらない。(幸いにしてオークションは時間が取れないと理由を付けて合成屋の店員君に代理出席してもらい後日競り落とした商品とギルの受け渡し交換をした。)

話が脱線したのでクワンさんとの昼食の件に戻そうか。

洞窟の中に入れば、天然ものの温泉につけていたのだろうか大きなダチヨウの卵に似た特徴的なまだら模様チョコボの卵が入ったホコホコと湯気を立てる箆を引き上げたのだらうクワンさんが立っていた。

「迷子さんは運がいいアルね。今日のメインはチヨコボの温泉卵アルよー」

迷子という言葉に否定を入れようという気にはならなかった。

何も知らないはずの私が意図的にあなたがここにいると知って訪れたといえれば不審人物として認識されてしまうことは間違いない。

素直に頭を下げて昼食への誘いの礼と名前を名乗ると彼（あるいは彼女）は「お礼はいいアル。ワタシはクワンアルよ。」名乗り返してくれた。

蒸し暑い温泉の湯気が天井から雫となつて落ちている洞窟の内部を進むと鍾乳石が目立つ比較的過ごしやすい部屋に出た。そこで用意されたクワンさん手作りの昼食は絶品の一言に尽きた。（自分が食べていたものは素人料理でその道を究め続ける生粋の求道の料理人であるク族の料理は自分の語彙力では表現しきれないのが非常に残念だ。）

チヨコボの温泉卵は今度トレノの闇市で卵を見つけてもしたらまた食べたいものだ。

第8話

理由を（意図的に）説明し忘れていたなんていたことはよくあること。

クワン洞での昼食の終わりに彼（もしくは彼女）に今回ここにいる理由を話した。

トレノの街で近くに温泉が存在するという話を聞いたこと。（これは街の住人であるナイト家のおばあさんに聞いた本場の事です）ぶん前に訪れたことと霧のモンスターで今中がどうなっているかは知らないといわれたが）

その温泉に入りたいたがために調査しようとしたこと（実際はこちらの入浴習慣がシャワーだけに等しく、トット家に珍しい猫足のバスタブあったのだが底が浅く入った気がしないため仕方なく温泉に関する情報を集めていた）

クワンさんは話を聞いた後にしばらく考え込んだ様子で腕を組みこちらを見つめていたが、視線に耐えられなくなる形でこちらから調味料などの森などでは得にくいと思われるものを街からは持つてくるのでこの温泉に入らせてもらえないかと交渉した。

洞窟にこもるような生活をしているクワンさんは調味料などの嗜好を満足させうるようなものは交渉に値すると目論見を付けたのだがこの後のクワンさんの言葉にあっ

けにとられてしまった。

「この温泉に入りたいと訪れた人だったアルね。別に好きに入ればいいアルよ。ワタシは奥に住んでいるだけでこの主じやないアルからね。」

率直に言えば無欲なお人だと思つたがここまであつさりと温泉に入る許可がもらえろとは思わなかつた。

そんな調子で温泉に入る許可をもらったので、では早速といった形で案外丈夫だった下へ降りるロープを伝い（万が一が起きたらと躊躇したが降りる時に無意識に無詠唱でレビテトを唱えていたように重量を感じなかつた）手縫いで作った薄い甚平型の湯帷子擬きに替えて入つた。

温泉に入っている間に魔力で試してみたいことがあつたので早速試してみた（やはり入っている最中は魔力が回復していたのでその時は絶好の機会と考えていたのだ）

最初は魔力そのものを練ることでマジックハンドのように念力のようなものを試したりした。（これは2、3回で成功した比較的空気で出来た手のようなモノで温泉をすくい上げたりこぶし大の球体状になった湯の塊をお手玉したりと遊んでみた。なんせ切り離すことなく使う伸びる手のようなものだから消費する魔力はないのかもしれない。）

その次は魔力による器の強化と変化の実験だ。（特定の部位に魔力を集中させること

で髪や爪を伸ばすなどの成長促進に、腕全体の強化を施すことで握っただけで石を砕くなどができた)

(伸びた髪と爪は街に帰った後にナイフで整える羽目になったが切った髪や爪にも馬鹿にならない魔力が宿っていたので処理に悩んだが暖炉で燃やすことにしたが、やはり尋常な量ではなかったように危うく自分が燃える羽目になった。)

(つまり鼻の先をやけどした。ポーシヨンで治ったのから良かったけど。)

(それと同時に髪と爪を燃やす際に鱗に包まれた赤や橙、少量の青そして白く光るように燃える尻尾のようなものを暖炉の奥に見たがあれはいったい何だろうか?)

そんな感じで温泉につきりながらの実験で休日を有意義に過ごした。

第9話

休日からのさらに半月経った頃トレノで1月を過ぎたころのことだ。

相も変わらずその日も故郷に帰る手段を探して時空間系魔法の研究論文（既存の時間操作系統だけでなく研究開発中空間移動系統のものも載っている貴重なもの）を片手にハーブティーを楽しみながら読んだ。（ブルーマロウという青いハーブティ故郷にも同じハーブティがあったがこちらのほうが青の色が入ってる最中もキラキラと鮮やかであった。ブルメシアで近年栽培に力を入れているそうだ。）

トット教授に口述筆記で書いてもらった小説の手直し作業（こちらがメインのはずなのだが1月も書いていれば教授もある程度、展開などをつかんだらしく間違いらしい間違いが無い）して教授に小説の間違いが赤のインクで添削されたものを返してその日の作業は終了となった。

居住棟に戻り一息ついたところふと目に入った伸びた前髪と爪が気になったナイフで切りそろえた。

相変わらずちよくちよく伸びるのが早い髪や爪（こちらに来てからだろうか異様に伸

びるのが早いのだ。

魔法を使用しない日などは髪が5cmくらい伸びたため気味の悪さを感じたがトット教授に相談しても「保有する魔力を体が排出のために伸ばしているので人体に影響はないはずです」とのことと断言できるほど教授が魔導師の身体に詳しくないのだ(そうだが)にうんざりしながら切った髪と爪を暖炉に燃やす際にそれを見つけた。(霧の大陸は4月でもまだ寒く感じるので暖炉はつけた状態にしていた。高台に位置し常に夜のトレノであればなおさら寒い。)

穏やかに熱を発する炭の状態の薪の奥からピコピコと擬音が聞こえそうな感じで爬虫類のような尻尾が突き出ていた。

その時は見間違いかなどと思い火かき棒を使い軽く薪の位置を調整し、(かき回した瞬間にシユツと聞こえてきそうな速さで消えた)切った髪と爪を捨てて(髪と爪は火にあたった瞬間に燃え出すのではなく暫くは燃えずにチリチリとくすぶり周りの火を吸収するように紅く染まった後白い炎に包まれるように一気に燃え尽きる)に薪を3本足した。

しばらくたつた後に髪と爪がやつと燃えたのだらう軽く火の粉が薪の隙間から吹き出しだ時だ。

白い炎を纏った蜥蜴のようなモノが組み合わせた薪の上で軽く伸びをする動作とと

もに現れた。

机に向かい帰る為の空間移動系統魔法（デジョンやテレポなどの名前は憶えているのだが魔法として使う時の構築式や発動条件が分からないため使えない）の研究論文を書いていた私は最初気づきもせず、部屋の温度を上げるために念力で（戦闘に使えるようにまずは日常動作で練習していた）薪を暖炉に足そうとしたときにようやくあくびをしながらかちらを見つめる蜥蜴に気づいた。

ようやく気付いたこちらにあきれるようなまなざしを送る蜥蜴、（この場合は仕方ないでしょ）呆気に取られてしまい動けなかった私に蜥蜴は暖炉の薪に頭を突っ込むとじたばたと赤々と燃えるように光る何かを口に咥えると頭をクイクイと呼びつけるように振った。

好奇心に負けた私が恐る恐る近寄ろうと席を立ち上がると蜥蜴からプツと音を立てるように光る何かが私の手元に吸い込まれるように投げられた。

先ほどまで火の中にあつた光る何かが私の手の中に収まると光は収まり不思議と熱くはなく逆にひんやりとした石の感触がした。

投げられた物をよく見ると赤く石化した植物の枝のような外見の宝石のように見えた。

第10話

もらったモノをどうするかはもらった本人が決めるべきだ。くれた相手は別として。

赤い枝分かれした石はキラキラと光る宝石特有の透き通る輝きとは違い植物が石化したかのような印象があった。

白い炎を纏った蜥蜴は顔を上げた時にはすでにおらず、もらってしまつた石だけがあの蜥蜴がいたということを証明した。(その日から暖炉を注意深く観察しているが今になつても蜥蜴のような生き物は見つけていない)

さてその件の石だが、直接持ち歩こうにも枝分かれした繊細な部分がかけてしまいそうなのが問題なのであつた。

見ている分には見事な枝ぶりの赤い石はとても値が張りそうだしできる事なら欠けることなく保存したいものだがそうもいかない。

石をくれた件の蜥蜴がもし私の知るあの召喚獣だったりしたら、この石は召喚のため
の交信に必要な重要な道具ということになる。

欠けることなく見事な枝ぶりを保つたまま装飾品《アクセサリー》へと変える技術を

生憎ながら私は持つていないのだ。

だが、私と違い知り合いに頼む分には別であった。

トット家の居住棟から出てビショップ家が営む合成屋の店員君のもとを訪れるまでは正直冷や汗ものであった。(スリに前のようにカモにされたら一発で盗られること間違いないのだ。)

慌てた様子の方に店員君は虚を突かれたかのような表情であったが客として訪れた私の手元を見ると納得したかのようにうなずいた。

色々ともらった石について話し合った結果、石の種類は珊瑚であったこと、本来それほど高い価値を持つ石ではないが深い紅色と傷一つついていない見事な枝ぶりが価値を高めていること、これを加工するなら多少は削る必要があることが分かった。

なるべく傷つけることなく装飾品《アクセサリー》に変えたいということを伝えたのだがペンダントやネックレス、指輪などにすると削る事になるといわれたせいで躊躇が生まれたがその時一つひらめいたことがあった。

簪としてなら削らなくてもよいのではないかと。

すぐに簪のデザインを近場のテーブルにあつた注文用紙の裏に書いてどういった物か伝えるとできるよと快い返事が来たが、その場合は頭部装備扱いの品物になるし魔法防御はともかく物理防御は期待できないとも言われた。

おそらく簪を装備できるのは私のような髪の長い人だけになるとも言われた。

終盤髪を切る彼女のことや元から短い髪のお嬢さんのことを考えたが、私は故郷に帰ることだけに集中したので基本かかわることをしなないし、何より彼女たちが覚える召喚獣の中に蜥蜴君の名はなかったはずなので今度はためらいなく注文した。

あの時、蜥蜴君からもらったのは私であるしこれから知り合いになるかもわからない人たちのことまで考えることはしなかったが、のちにこれが後悔の元になるとはつゆ知らず注文した品がすぐに出来上がることに浮かれていた私であった。

番外編：検証実験その1

い。
RPGで何が怖いと聞かれれば私は転移の失敗による「いしのなかにいる」が一番怖い。

故郷への帰還のための転移魔法検証実験その1について。

ついにこの時が来たといってもいいだろう。（ここまで来るために数えるのも悍ましい level の霧の魔物を幾度となく屠ることで資金や資材として得たり、実験動物として捕獲してきたことか）

（霧の魔物は霧による生物の進化でない限り発生して間もない存在であれば曖昧な肉体を近場の金属などを貯めこみ存在を確定しようとする習性がある。召喚獣と似ているがそのもつとも足るものがギルといった貨幣があげられる。）

（長く地上にとどまれば存在として一部が倒した際に残されることがある。多くが羽や毛皮、爪などがまれに高濃度の魔力を持った鉱石が落ちることがある。魔石と言われる品物なのだが魔物の胆石だろうか？）

(こちらに来てから故郷の道徳観念が幾度となくすり減らされてきたため正直現在でもまだ正気なのが奇跡に思える)

故郷に帰る為に研究していた魔法について一定の成果が出たのだ。(使用した魔石は数百にもおよび一部は砕き磨り潰して魔法陣用の顔料に混ぜ込んだりもした。)

空間転移の際に肉体が想定外の場所に出るとまずい為まずは精神体の身を送り込む形にしてみた。(水の中など呼吸ができない場所にいきなり出たりしたら目も当てられないために霊体を先に送り込むことで様子を見ることにした。)

(抜け殻となった体がほかのゴーストが入り込んでゾンビ化なんて笑えないのである一定の魔力の波長の身を通す結界を3重に敷いて肉体を保護して今回の実験に挑んだ。)

空間転移魔法を発動すると同時にあたりの景色がゆらりと水のように揺らぐ、気持ちの悪い乗り物酔いが脳みそを揺らすような感覚が(霊体状態なのに)する。

「デジョン」

発動のためのキーワードを発すると同時に意識が遠のくが霊体があいまいになるようなことは自身の死に近づくことになると思ひ、(霊体なので床から浮いてるが)足を踏ん張りきつく目を閉じて自己を認識するイメージを強めることでやり過ごした。

体感時間は数分もたっただろうかと思うが転移自体は成功したらしく、目を開けた先はどこかの通路だろうか上からの通路を照らす光が長い間目を閉じていたせいで緑っぽく見える。

窓は近くになく通路の先から青く見える光と共に人が騒ぐ音が聞こえた。

通路を通りひらけた先に出てみると人々の歓声とともに信じられない光景が目飛び込んできた。

スタジアムと言えるような場所で何千いや何万人という人が熱狂に沸いていた。

中央に巨大な機械仕掛けと見える近未来型の円形に浮かぶプールに十数人の人が泳いでボールをタツクルを仕掛けたりして奪い合っている光景だ。

その中でも特に目立つ半裸の浅黒い30代くらいの男がボールを取って集団から抜け出した。

解説は熱が入っているのか「今日こそ幻のジエクトシュート1号や2号は見られるのかあー!」といった調子でそのジエクトと呼んだ選手を応援している様子だ。

電子掲示板に映る時間と得点を確認するともう一分と間もなく3対3のため延長の試合に入るかもしれないように人々は興奮と共にボールを持つ選手に声援を送っている。

同点でこの残り少ない数十秒での彼の技は圧巻の一言だった。

ゴール前の選手を次々と素早い動きでスルーしていきそれでも追いついてくる選手2名に仕方がないといった動きでその場に留まると追ってきた選手にボールを蹴って当てた。

追ってきた選手にあたったボールが跳ね返り、ジエクトと呼ばれていた選手にむかっていたがそれすらも逆に余裕を笑みと共に再度ボールを殴ることで二人目の追いつい

てきた選手に当てた。

二人分の跳ね返り勢いがついたボールがさらにスピードを上げて見当違いの上の方
向へ向かっていくがジエクトは誰より速くまさしく飛び上がるような泳ぎとスク
リューを思わせる回転とともに更に勢いをつけて凄まじい威力のシュートを放った。

スタジアム中の観客が息をのむ。

残り時間8秒弱だ。

キーパーがボールを阻むために手を伸ばす。

残り時間6秒。

凄まじい威力のボールにあと少しでキーパーの手が触れそうだ。

残り5秒弱。

だがそれよりも何よりも。

残り4秒

ジエクトの放ったシュートは。

残り3秒

ゴールへと。

残り2秒弱

突き刺さって

残り1秒

魅せた。

試合終了の音が人々の歓声でかき消えたとしか思えない。

あたり一面に「ジェクト！ジェクト！ジェクト！ジェクト！」とたつた一人の名を皆が呼ぶ。

「ジェクト！ジェクト！ジェクト！」ファンたちのコールが止まらない。

ポンツと音を立てて目の前に白と青の特徴的な丸い凸凹がついたボールが落ちてきた。

いきなりのことで驚いたが周りを見渡してみても拾いに来るような人がいない。

通路の前にはいた私のことは誰も目もくれず周りはジェクト選手の名前をコールするファンだけで持ち主が一向に現れる気配がない。

仕方がないので拾い上げてみると目についたのは黒いサインペンで書かれただろろ荒々しい感じのスピラ文字の名前が目に入った。

“ザナルカンド・エイブス エース ジェクト”
アルティマニア
 読めたのはひとえに故郷でこの世界に関する解説書を買って読み込んだ覚えがあるからだろうか。

クラリと眩暈と共に目の前の光景が水のように揺らぐ。

どうやら安全のために魔法陣に設定していた時間が来たようだ。

これ以上の霊体での転移先の探索は体に戻れなくなる危険が出てくる。

デジョンと対となる帰還のための魔法の術式を組み上げてその場で即座に詠唱するがふと手荷物をどうしようか悩んでしまう。

「それはあげるよ。」

後ろから声をかけられた。

振り返ると今まで誰もいなかった通路の真ん中に紫のフードを被った男の子がいた。

「お土産だよ。不思議なマレビトさん。」

驚くこちらに軽く手を振ると帰還用魔法の術式に向かって魔力を注がれる。

「それだけの魔力だと迷子になっちゃうからね。」

どうやら親切にも手伝ってくれようだ。

頭を軽く下げる動作と共に礼を言った直後に目の前の光景はいつもの居住棟へと変

わっていた。

以上の内容で今回の実験は転移自体は成功。

転移時間の延長については研究中であり、

転移先の故郷への座標指定は失敗したと記録する。

なお転移先の物質について夢の残滓であるはずのザナルカンドからの手土産は極秘事項としてしまっておくことにする。

第11話

そろそろ慣れたその頃にこそ怪我や事故というものは付きものである。

珊瑚の簪事件からの生活は主に戦闘経験のために魔物狩りや技能の習得に費やした。
珊瑚の簪事件からの生活は主に戦闘経験のために魔物狩りや技能の習得に費やした。

トット教授からも定期的に行われる地下の連結転換レバー整備の際、ガルガン・ルーに現れるクロウラーやドラゴンフライの駆除を依頼されたり、ガルガントが背負うトロッコの掃除の手伝いもした。

蜥蜴君からもらって作られた珊瑚の簪は予想どおりに召喚獣の交信用の代物だったらしくじつに奇妙なことがこの身に振りかかったとしか思えない目にあった。

不思議なことは特に記憶に残るものだから。

クロウラー2体との戦闘時にこちらが油断していたのかカマの一撃が首を刈り取るように振るわれてしまい、咄嗟に致命傷を防御した両腕の皮膚が爬虫類特有の鱗状の代

物に覆われて視界に入った髪の毛が陽炎のように揺らめく白い炎の覆われるように変わってしまった。

幸いなことに瞬時に戦闘が終わると同時に元に戻ることが判明した。

最初に現れた時にレバーの点検作業の護衛をしていたので近くの整備員に見られたかと慌てたのだが確かに視覚的に目に入る位置にいるのに見えていない様子だったのが疑問だったがこちらとしては隠す分には都合がいいので黙っていた。

居住棟に戻り扉や明り取りの窓という窓を閉めて明かりのための太い蠟燭と暖炉に火をつけて鍵をかけてもう一度確認のために意識をして発動してみようとした。

結果として、次のことが分かった。

まずは意識的に発動できる代物ではないが近くに吸収できる炎があれば別に危険でなくとも変えられること

変化しようとして魔力を練ってみても何の反応が返ってこなかったため危機的状況だけに限るといった感じだろうかと諦めて窓を開けて火を消そうとして蠟燭に近づいたときにいきなり火が消えて腕に鱗が生えてきて吃驚した。

全身の皮膚が鱗になるわけではなく一部が鱗に変わることに

背中や腕、足は鱗に覆われたが胸部、腹や手のひら、指の腹部分、足の裏などは頑丈な皮膚のように分厚くなっただけでまるで人間が人側に近いドラゴンになったようだ。こちらのリザードマンのように完全に異形ではなくずいぶんスマートだが、尻尾や角は生えてはいない。

髪の毛が白い炎に覆われて火を吸収できるようになること

蝋燭の火を吸収する形で指先から変化したのもしやと思ひ暖炉に手をかざしたら、この日の疲労と失った分の魔力と体力が回復したが、唯一の明かりであった暖炉の火が弱まって部屋全体が暗くなったので慌てて薪を足す羽目になった。

顔や目に変化は目視できる範囲で変化はしないこと

顔面や瞳が爬虫類っぽい変化はなくあくまで髪や体だけの変化にとどまっただろう。

こうした変化の中で一番気になる戦闘面^{モンスター}の変化による強化なのだが、後日トット教授に頼み込んで（トット教授には修行と魔物の駆除^{モンスター}といったが、実際その通りなのだが）変化のことは黙っていた）ガルガン・ルーで霧の魔物を相手取る形になった。

力と防御面のみ強化だけであったが防御は物理、魔法それぞれ1.5倍で力は2倍といった形で正確に測ったわけではないか普段と違いそう感じた。

変化の際の火種として着火剤代わりの火属性の魔石を利用してみたが火が出るものであれば瞬時に変化することができたため余計な荷物が増えることにはならなそうだ。

自分でもどうしても足りないと感じていた物理面での強化はありがたいことだが、今まで頼ってきた魔法関係の強化が防御力のみ、主に目立った必殺技もなく（各種のブレスや火属性の魔法を期待していたのだが）大変地味な戦闘力の強化といったのが結果だった。

落ち込みはしない。なんせ召喚獣といった特殊な存在なのだから本来であれば召喚士一族でない私に変化といった形でさえ召喚獣の力の一部を顕現できたのは望外にすぎることだから決して落ち込んではいないのだ。（このことが周りに知られるリスクのほろが胃が痛くなる。）

この日から数日後、トレノでの生活が1か月半を越えたころ、ナイト家のモンスターへの挑戦が大体的に募集されるチラシが配られた。

内容はあまりに近頃の挑戦者が弱すぎて魔物への餌代がかさみ過ぎているから程よく強い奴がいい感じの試合をしてくれないかという考えが読み取れるくらいにはあか

らさまであった。

いい機会なのでちよつと見物してみようと思うむろん目立たない範囲で。

第12話

時に危険を伴う行為であるが目的のために目立つこともやむをえまい私はしないが。

ナイト家が飼育（捕獲）している魔物モンスターはザグナルであった。

グリフォンでないことに疑問も抱かないこともないがこの後に新たに捕獲されたのだろうか。

本来であれば狩猟祭などの華々しいボスとしての狩られる運命であったのだが今回の狩猟祭ではザグナルを狩りきれぬほどの狩人がいなかったらしく巡り廻って長らくナイト家に留まることになったらしい。

大型のザグナルが戦闘をするのに十分な広さはあるのだが、狭苦しそうに牙を振り上げては次々と挑戦者を吃逆上げては倒していき疲れた様子など見えやしない。

公正を期すために1試合後に魔物にも回復モンスターが施されていることも関係しているのだろう。

下に落とされる形で入れられた挑戦者は倒されるか自らの限界を悟り棄権すると下

のほうに設けられた魔物の搬入口モンスターに逃げ込むか荷物のように引きずれる形で救助されていた。

広告に書かれていた望みの武器を与えろという事に集まった大多数の荒くれどもがナイト家に押し寄せていたがまったく言っていないほど腕のある者たちではなく情報として知っている腕の立つものが現れる気配もなかった。

私はその時何をしていたかと言えばナイト家に訪れた荒くれ者たちの飲み食いした後の片付けであった。

なんてことはなく人が集まることで屋敷の周囲が汚れるであろうことを予期したナイト家の人が当日だけのアルバイトに募集していたのを店番さん経由の簡単な面接で雇われただけの話であった。

大体的に挑戦者が募集されたとはいえ目立つことはなるべく避けようとしての判断は間違いではなかったことが分かる。

ダリの村から来た売り子のお姉さんがギザール酒やつまみを荒くれ相手に売り歩くさまはまるで小規模の地区の祭りを見ている気分だ。

この調子の中でザグナルを倒したものはさぞもてはやされるだろうしちよつとした

有名人気分になれること間違いなしろうが私はそんなのは性に合わないし御免だ。

片付けの休憩がてら売り子のお姉さんからトリックスパローの唐揚げをもらい（チップをはずんだら綺麗な顔を綻ばせて商品を手渡された。目測だが他のと違って唐揚げが1個多い）口に放り込む、唐揚げは衣がサククリと音を立てて口の中に力強く噛みごたえのある肉の味を溢れさせて、続けて飲んだ水筒に入れてきたジンジャーエールの辛口だがすつきりとした飲み口にとってもあった。

仕事中にお酒は厳禁なので本来であれば売り子さんが売っているギザール酒で一杯といきたかったのだが無念なことだが仕方がない。

休憩時間が終わりに片付けの仕事に戻ろうとした時だ。

「誰か来てくれ！ザグナルが檻から逃亡しよう」と鉄格子を破壊しようとしているんだ！」

寝耳に水とはこのことだろうか。

第13話

その時どうするかは自分が決めることその後には後悔することになってもだ。

時間帯にしてもう普通であれば日も暮れて集まった荒くれたちにお子様は寝る時間帯だからかわれることにも慣れた時にそれは起こった。

突如としてザグナルが暴走を始めたのだ。

それはそうだろう普段であれば数人来るか来ないかの挑戦者を相手に簡単にのしていくだけで餌を得られる環境から、よつてたかつて自分を殺そうと試みるものだからどんな勇猛なものでもチャンスがあるなら逃げ出すに決まっている。

ナイト家もそのことを予想していたのだろう対応は迅速に行われた。

暴れているザグナルを強制的に鎮めるためにあらかじめ関係者に用意されたスリプル草の粉末を持ったマスクをつけた警備兵がザグナルを人数に任せて檻に多量に投げ込む事ですぐさま鎮圧した。

この後のことはいうに及ばず寝てしまったザグナルを起こして騒動を再発させるわけにもいかないのをお開きとなつてしまい、それに伴い倒した者へのご褒美である望み

の武器をお流れとなってしまうた。

私は騒動を鎮圧に駆り出されることもなく（正規の警備兵じゃないから）祭りの空気を楽しめながら仕事をちゃんと全うしたため、後日追加のボーナスをもらうことになったから幸運なことである。

もらった給料とボーナスは闇市で見つけることができた貴重な旅行用に使われる時間停止機能付き容量無限のアイテムが99個づつ入る魔道具の収納バック代に消えてしまったが十分な収穫を得たものだ。

さて件の騒動を起こしたザグナルであるが、数日後に名も知らぬ覆面の双剣の人物が倒すことに成功したそうだ。

はて一体だれが倒したことやら？

望みの褒賞としての武器はジュユワースとマドウという突剣が2本贈られたそうだ。

こういった騒動があつたが極夜の街トレノの治安は変わることなく、いやむしろ2か月目にして初めて物騒な目に合うこととなってしまうたがこれが本来はこの町の普通のことなのだろう。

貴族の街は表向き、裏に入れば盗賊の温床となっているのだから。

さてそろそろトレノでの話は終わりに近くなってきた。

なぜなら上に書いたとおり容量無制限という、うたい文句の収納バックを手に入れたことがきっかけだ。

調査旅行という名目である程度戦闘もできる私が調査員として各国に出かけることになったのだ。

あのバックは相当に珍しいものらしく王侯貴族ですら持つてゐるものがないのだ。うだが、劣化版の時間経過が遅くなる程度で容量が100種類で50個までなら入るものなら相当数でまわっているらしい。

私のバックは持ち主が認証した人物であれば親バックの中身から登録した子バックからでもアイテムを取り出すことができるので時間のロスなく荷物のやり取りができる優れものだ。

なのでトレノを離れての調査員にトット教授がビショップ氏に推薦する形で私が選ばれたのだ。

初めはいきなりの決定事項にトット教授を問い詰める形となってしまうが教授が私の今後を案じての推薦ということが分かった。

「ここトレノにいてもあなた様が求める情報は遅々として収集できませんまい」

「ですが、各国をめぐり新たな方法を探る手段であれば私でも協力できます」

「とどまるのではなく歩き続けなされ」

「さすれば希望の灯にも出会えますでしようから」

やはり教授は背中を押してくれる人物なのだと思つた。

私が迷っていることもここから旅に出ようとしていることもお見通しだった。

小説の翻訳に関しても教授は。

「旅先でも少しづつ手紙を交わす形で続けていきましようか」

「貴方は少しでも故郷に関わっている時は心から安堵している様子でしたから」

「心の平穏を保つことは大事ですぞ」

トット教授には世話になりっぱなしである。

第14話

旅立ち前の一波乱は冒険者にはよくあることかな？

トレノを出る出発の前夜にとても困ったことが起きた。

南ゲートを越えるために発行されるゲートパスが何者かに盗まれてしまったのだ。

侵入された部屋には荒らされた形跡などほとんどなく、ゲートパスを入れていた革製のカード入れをしまっていた鍵付きの机の引き出し、其処のみが丁寧に壊されることなく開錠されているだけの明らかに盗みに慣れたプロの犯行だ。

ただ単に物取り目的に私の住んでいる居住棟に忍び込み金目のものを粗方盗むのではなく明確に狙ってゲートパスを盗んでいったことに嫌な予感を覚えるが取り返さな
いわけにはいかない。

あれはトット教授が私の身分証明と多数の国を長期間滞在移動する調査員としての大事な特別製の許可証でもあるのだ。

幸いにも手渡された直後の名前を書き入れていない白紙の状態であったなら悪用されたかもしれないが既に名前を記入済みの代物を明確に盗んでいったのは私本人に用

件がある可能性が大きい。

おそらくゲートパスを盗っていった盗人はトレノの闇市に逃げ込んだかもしれない盗品や犯罪者がこの町で最後に行きつくのはそこしかないし、盗みを依頼した人物が背後にいたとしても同じことだろう。

犯罪者との取引場所なら怪しまれずに集まれる場所はこのトレノでは決まった場所ではない。

夜の街の怪しい取引現場は街を巡回する兵に粗方知られているのだから。

トレノの街の闇市は明確な場所が決まっていない。

毎回開催される場所は人知れず関係者のみにわかる形でしか伝わらないし、法によって取り締まるべきものの温床ともいわれる場合は関係者の口を重くする。

そうして私が闇市に訪れることができるのも商船の護衛仕事という偽情報に騙された酒場で飲んだくれていた酔っ払い水夫達経由で手に入れた情報があったからこそその結果だった。

そうトレノの闇市は多数の商船が街の下にある水路に集まることで開催される巨大な水上マーケットだ。

船ごとに乗っているものも様々だ。非合法薬品や毒、きらびやかな盗品の装飾品、入手先不明の武具や防具、不可思議な形の魔道具（呪いやいわくつきの代物）、廃材にしが見えない品などが水路に一気に集まる。

下水道を伝って徒歩で来るものや小型船で乗り付けるものいる、変なもので比較的大きな商船の空樽に隠れてくる変わり者もいたりする。

それぞれルートごとに身分もまるわかりだったりするが素性を詮索するのは自身の首を絞めかねないので用注意だ。

私が目指すのは廃材取引現場、ゲートパスなんて足の付きやすい代物はそこでしか扱えやしないし、犯罪者が入り浸るのもそこしかない。

「コソ泥のマスウが大金を手に入れて…」

「あのヤロウがうまくヤリがったな！」

「この馬鹿！声がデカいッ！」

道すがらのコソコソとあちこちで集まる深くローブやマントを着た顔を隠した者た

ちが噂するコソ泥のマスウなる人物、おそらくは彼がゲートパスを盗っていった者だろう。

大金を手に入れた後の彼の足跡が気になるが（口封じに依頼した人物に始末されるような寝覚めが悪くなる展開はなかったようで安心した）私の目的はゲートパスだ。

首尾よく金銭の取引で応じる人物が依頼者であつてほしいがという祈る気持ちとともに廃材取引の現場に到着した。

「こちらまでご足労いただき感謝します」

盗品の販売が主な場所で横合いから話しかけてきたのは2メートル近い体格の焰色というべき髪色の巨漢を伴った白い口髭が生えたフード付きの短い外套を着こんだかすれ声の顔は見えないが初老の男性と思える人物が話しかけてきた。

「貴方様が求めているものはこちらで保管しております」

「話し合いの場所を移しましょうか」

「ここではどこでだれが聞き耳をたたえているかわかりませんから」

「どうやら今は厄ネタの依頼人についていくしかないようだ。」

第15話

貴族というものは矜持と誇りで生きているものだが平民はそんなものに執着しない。

人が寄り付かない闇市の外れにまで移動したことでやっと話し合いに移ることができた。

「さて建前や前置きを除いて本題のみお話ししましょうか」

かすれ声の初老の人物は語る自分はルーク家の遠縁にあたる者で今は商人としてトレノで荷を扱っているものだと言回あなたに持っているものとあなたが持っている権限が私の商売に差しさわりがあるため呼び出したのだと。

「多少無作法なのはご容赦願いたい何分急を要したものでした」

ゲートパスを小悪党に盗ませることで闇市に来させることいい、さらに人の寄り付かない外れまで来させたのだからこんなことだろうと思つた。

ビショップ家の栄達は合成屋、魔道研究や星に関する観測記録などの表の研究のみならず闇市で扱われるような怪しい魔道具や装飾品、武器や防具類など多岐にわたる。

調査員として各国を渡り歩くことになる私を通してさらに各地の名産品などに手を伸ばすとすると他の金策関係に苦勞している貴族がうるさくなるのは必須ということ。

現に闇市の関係者が出張るほどにビショップ家がこれ以上出る杭になればなるほど誰かが槌を振るわなければならぬということそれが今回はルーク家という商業関係で闇市に関わるほどの貴族がうるさくなるわけだ。

しかしながら巻き込まれた私にとってはいい迷惑であった。

確かに調査員として各国をめぐり定期報告とともに各地の名産品等を土産にするだろうがあくまで私の持つバックに入る量とて高が知れているというのだ。

つまりはビショップ家に対するていどの嫌がらせだ。

ルーク家に関する噂もあまりいいモノがないのが余計拍車をかけるがこの時の私にとつて問題だったのは商人と名乗った彼の横に立つ焰色の髪の武人である。

2メートル近いと表現したが彼が猫背のせいであらう感じただけで実際には越えているだろうし、肉体はそれに合わせた無駄のない筋肉に覆われているし、まさに体からし

て格闘を主とした生粋の前衛職の彼から逃げきれるかどうかをだ。

さすがに彼についてわからない者はいないだろう。

酒場での手配書から彼がこの町に現れる可能性が低いと考えていた過去の自分が憎い。

どう見ても焰色のサラマンダーさんです、ほんと有難うございます。

いくら私が今日までに沢山の戦闘経験を積みザグナルを単騎で倒したとはいえそれは魔物相手モンスターの話であり、裏稼業NO. 1の殺し屋相手に対人戦初めての私が命かけての戦いとか正直お話にならない。

あーだこーだと考えている内に商人さんのお話は終わったらしくゲートパスが入った革ケースが商人さんの手に握られている。

「これをお返しする前に少しばかりこちらの戯れにつきあってもらいます」

嫌な予感ここに的中だった商人さんはサラマンダーさんを使ってこちらの実力を図りたいとのことだった。

「逃げてもよろしいですよ？」

「その場合はゲートパスは彼に預けますからトレノの街への道まで逃げ切るだけの実力

があるのだと判断材料になるため力を示せば返しなさいと事前についてありますから」魔法ありきの剣士型中衛タイプの前衛職にガチの体力半端ないモンク型の前衛職はきついことこの上ないので闇市の外れからトレノの街への道までガチの鬼ごっここと逝くことになりそうだ。

「では開始とまいりましょうか」

特にスタート特有の合図の音もなく唐突に命がけの鬼ごっここの幕は切って落とされた。

第16話

生きたいと思う。行きたいと思う。逝きたいと思う。この場合はどれになるのだろう。

絶賛全力の生死をかけた船の上での鬼ごっこ中、この時の私は意外に足の速いサラマ
ンダーさんを相手にずいぶんと皮肉に満ちた考えに浸っていたと思う。

メインの盗賊君の次に速いと思われがちの竜騎士の姐さんよりも初期パラで比べ
ると彼は加入時期が遅いだけで肉体面で素晴らしい性能を誇ること（かといって魔法系は
お粗末かと思うなかれトランス時の全体技と化した絶技は強力だ）を思い出して道の曲
がり角や牽制用にグラビデを空間指定で飛ばして即席の見えない罠にしたりで距離を
稼ぐことで逃げることを優先した。

時折、急所めがけて円月輪を投げつけてきたり、こちらの動きを先読みするように急
接近しては思いもよらぬ方向から爪の一撃をくらわせて来ようとしたりする彼から追
い詰めて殺すことを専門にする暗殺者の一面が感じ取れる。

遊ばれているとすら思える彼の余裕（油断ともいえるが彼はそう思ってもないだろう

狩られる側は明らかにこちらだ）に考えが浮かぶ、相手が油断してくれているというならば其処をつくまでだ。

新たに手に入れた装備の魔法に魔力を入れる。

「
」

実をいうとこれを使う機会が来るとは思わなかったのが本音であった。

「追いかけてここは終わりだぜ」

後方から声がかかけられると同時に避け損ねた円月輪が右太腿の膝に近い外側を切り裂いて悲鳴を口からいやがおうにも噛み殺しきれず漏れると同時に膝が地面についてしまった。

「まあ、長く持ったほうだったな」

がくりと円月輪が掠ったほうの足から力が抜けていくと同時に感覚がなくなりつつ

ある恐らくは刃の部分に麻痺させる薬品でもついていたのだろう。

「終わりだな」

流れ出る血が止まらない感覚が遠くなる。

爪の一撃が心臓めがけて放たれた。

嫌にあつけない終わりだなと彼は目の前の死体を眺める。

先ほどまでに見事な逃げっぷりを見せた人物が無様に薄暗い水路に屍をさらしている。

魔法を使った簡易的な（だが威力はえげつない）見えない罠には苦戦させられた。

トレノへの道につながる下水道を出る直前まで逃げ切ってみせた身体能力は純粋な戦闘ではどんな技を繰り出してきただろうかなど考えても仕様がない事が次々と湧き上がるが所詮はちよつとした感傷に過ぎない。

自分は殺しを請け負う裏の暗殺者だ。

決して正道を行く表の格闘家などという華やかな職でない。

思考を振り払う様に目の前の死体から殺しの証拠の為に何か証拠となるものをと
われていたことを思い出し髪でも切り取ろうかと近づくと

爪についていた血を拭い去り、死体の髪に依頼人に渡すために懐のナイフ取り出し切
り取ろうとするとふと彼は違和感に気づいた

手に取った髪の毛が徐々に絵画から色が抜けるように触ってる感覚がなくなってい
くのだ。

いや気のせいではない！

即座に死体から離れ爪を構えあたりを警戒しながら死体の様子を注意深く観察する。

心臓を貫いたことで噴出して地面を汚していた血が消えていく。

死体から色が抜けて徐々に透明になり消えていく。

爪についていた暗殺対象の血も消えていく。

目の前にあったはずの死体は完全に消えてしまった。

これが意味することは

「まんまと逃げおおせられたのかよ…」

暗殺の失敗であつた。

第17話

行動することに意味があるのではないし結果として意味のある行動になったただけの話。

さて下水道に逃げ込んだほうの私は無事に追いかけてコロコロされた時間に私はその情報を魔法の代償であるコロコロされた時の痛みのフィードバックと共にそれまでの行動した記録を商船の空樽の中に隠れながら脳内に受信（こう書くと電波な人みたい）した。

さすがの腕前であると称賛するべきか。

苦しまぬようにという対処であろうか。

急所である心臓にかかる痛みだけが私に襲い掛かった。

追いかけられている際に使用した魔法について忘れぬうちに書き出しておこうか。

魔法名はクイックとブリンクにデコイだ。

最初に紹介するクイツクは時空間系の魔法であり自身の意識と肉体を意識と無意識、精神と物質の狭間というべき加速した時空へと引き上げて行動速度を引き上げる代物であるが、つまりは即時2回連続行動を可能とする魔法であった。

魔法の効果は折り紙付きといってもいいだろう。

なんせ魔物^{モンスター}相手に試した際に真正面と真後ろからの同時に2つの斬撃をくらわせた^り、まるでFateの自称NOMINのSAMURAIの宝具であるほぼ同時に3つの斬撃を放つ燕返しに似た攻撃も可能だ。

いやどちらかというところ2か所に体が存在するように感じた事と時空間操作系統の魔法なのだから侍アサシンよりもFGO時空の巖窟王の宝具のほうかもしれない。

最も練度と戦闘経験や剣の才能に2回行動までの魔法性能の関係上あくまで似たような攻撃擬きであったのでぬか喜びだった。

さて考察や感想は置いておいて。

クイツクの魔法効果が発揮された際に2つ目と3つ目の魔法が出番となった。

2つ目の魔法、ブリンクは簡単に言えば分身を生み出す魔法だ。

さすがにラーメン具材名主人公のトンデモ忍者漫画のようなぶっ飛んだ性能の影分身を作り出せるわけではなく、あくまでリモート操作が効くセミオートで逃げ回る等の簡単な指示を聞く作り出した術者そっくりの分身が作り出せる魔法であった。

使いようによつては非常に有用であり、自身の体にかぶせるように発動した際は回数制限である2回まで物理攻撃のみを無効化する形で肩代わりさせたり、離れて使用した際は1体だけが耐久力のある匣代わりにも使えた。

更にこの魔法ちよつと嬉しい事にそれまでどう行動したかを術者の脳に記録知識として還元することが可能なのだ（戦闘経験はどうあがいても無理だった）。

おかげで副次効果の記録知識脳内還元を使った論文の読み込み整理などの帰る為の研究をはかどらせることができた。

ただこの魔法はちよつと癖のある魔法で前に書いたとおり、ある程度分身が致命傷の攻撃を受けた際、術者に一番致命傷となった攻撃の痛みだけがフィードバックされてしまうし、そして必ずしも匣として追いかけられるわけでもなく逃げるまわるだけで攻撃行動がとれないのだ。

この点さえ抜けば破格の魔法と言ってもいいだろう。

そのブリンクの魔法の欠点を補う形で使ったのがデコイである。

この魔法、言ってしまうえば挑発行動などのターゲット集中効果なだけの魔法なのだが本当にこういう非常時にしか使えない。

なぜなら前に森で使用した際に周囲の魔物モンスターを無差別に刺激して集めだしてしまっただからである。

理性のない魔物モンスターを無差別に集めだし追いかけられて死に物狂いで逃げだした際にもう二度と使うものかと思っただが使い道は意外とあるものだ。

焔の旦那が分身のほうを追いかけけるように姿が見えない位置で以上の魔法を使用して本体である私は近場の商船の空樽の中に隠れて分身は下水道に逃げ込み、彼が追いかけていくのを確認した。

この際、最悪逃げ込んだ空樽に気づかれた際はあの変化を使った肉体強化に頼った戦闘行為に移ったことだろう。

使用した際に彼がどう反応するか見てみたい気持ちもあったが自重することにした。それが眠らない街トレノの私が過ごした最後の夜の記憶である。

トット家に逃げ帰った後のことだが、詫びの品と思わしきポーション瓶の詰め合わせと共にゲートパスがルーク家から届けられてすっかりゲートパスを取り返す目的を忘れていた私がいたのは余談である。

第18話

国と国を移動する際の旅こそがロマンに満ちていると私は思う。

名残惜しくもトレノを出発して初めに訪れたのは南ゲート、トレノの門だ。

橋を架ける形であるために向こう側のリンドブルム兵に声をかけゲートパスの確認後ようやく渡ることができた。

キャラキャラと音を立てて架けられた橋を渡った先でどこを目指すのかと兵士に確認されたが調査旅行のため各国をめぐるつもりで何回か南ゲートを訪れるかもというリンドブルムを最初に目指せばいいのではないかと言われた。

曰く、南ゲートをこのまままっすぐ進んでもダリの村しかなく、あそこは村の近くに氷の洞窟があるがこの季節完全に氷が解けてしまうから雪解け水にあふれて中は危険なだけで12月あたりが見頃だったんだがなという情報をもらえた。

時期的に5月の半ばであったこともあり、とつくのとうに雪解けの季節を過ぎ過ぎ春の気候である。

当然の結果であったが目指す場所のアドバイスを貰えたのは有り難い事であった。

目指す国をリンドブルムと定め兵士に礼を告げてルートの確認に地図を開いた。

トレノ門からアレクサンドリア方面駅へ、そして鉄馬車ベルクメアに乗ってアープス山脈を越えてリンドブルム方面駅のボーデン門に着く、其処から徒歩でリンドブルム地竜の門に、という遅くともものんびり観光しながらなら2日ほどリンドブルムへの旅だ。

荷物をらしい荷物を抱えてはいない旅姿（例のバックはウエストに吊り下げる小さなタイプの戦闘時にも邪魔にならないサイズ）だがクワン洞を訪れた時とは違い準備は万全といつてもいいくらいだ。

早速訪れたアレクサンドリア方面駅で見た鉄馬車ベルクメアは圧巻の一言であった。

定時道理の到着と共にまるで生き物のように霧機関特有の霧の噴出が一角獣の鼻の部分からフシューと軽く噴き出る事にユーモラスを感じた。

乗り込む前に少々小太りの女の子からテントの予備を買って座席に就いた。

窓から見える景色はアープス山脈特有の茶色い岩肌のみだが高度が上がるにつれて灰色の岩に変わり、時折、空で飛んうでいる飛空艇がかすかに見えるくらいで日向の座り心地のいい椅子は思わず眠ってしまう条件が整い過ぎていくくらいだ。

生憎だが私は一人旅なのでうかつに眠ってしまうわけにもいかず（ついたことに気づかずに戻ってしまうと二度手間だ）必死に落ちてくる瞼にあらがっていると車掌さんから「着いたら起こして差し上げましょうか？」という微妙に見当違いな親切なことを言

われてしまった。

長くトレノに居たせいで日の光が心地よいだけですよと返すわけにもいかず、あいまいな笑みと共にその場を流して中間の休憩所に到着した。

南ゲートの飛空艇の通り道が天井つまり文字通りの真上にある中間の休憩地点のみで売っている名物まんまるカステラをお土産用の梱包にして2つもらいトット教授とビショップ氏宛でメモを書き梱包に挟みバックに詰めて今度は自分用にこの場で食べる為に買い求めてみた。

第19話

！
わっかに切れれば太陽の笑顔、二つに切れれば虹の架け橋南ゲート名物まんまるカステラ

思わず日記の書き出しに広告を書いてしまった。

まんまるカステラはその名に違わず私が知る四角い長方形カステラではなく。ケーキ型からそのまま出したようなまんまるの形であった。

今回は二つにナイフを入れて虹の架け橋の形で食べてみた。

ふんわりとした弾力の生地に貸し出された銀色の小さなフォークをたてるとふわりと音をたてる様に柔らかく刺さり、フォークに刺さった生地を口に入れた瞬間に卵と砂糖の単純ながらやさしい甘さが広がり多幸感に包まれた。

しっとりとした生地に下部分のザラメがいい感じにカラメルのように感じ、思わずバツクから取り出した水出しの冷たくした紅茶の入った水筒を飲んでしまった。

水分補給は実際、旅の間は重要なので自重していたにもかかわらずこのまんまるカス

テラの魅力には勝てなかった。

そうこうしている内にアレクサンドリア方面行の鉄馬車が到着、残り半分のカステラを貰った紙袋に詰めて鉄馬車へと乗り込んだ。やはり日当たりの良い窓辺に座り鉄馬車からの変わりない岩肌の長めに眠気に惑わされながらボーデン駅に着いた。

ここからは徒歩でリンドブルム地竜の門へといくことになった。

しかし、ボーデン門から出発した時刻は夕方、途中で野宿のために霧の中で安全な場所を探さなければならぬために少々あちこちと歩き回る羽目になってしまった。

そして、その日の野宿のために魔物のいない場所を見つけた時には星が見えかけの空模様になっていた。

野宿のぼしよにえらんだのは厳しい岩肌の道なきけもの道（正規ルートじゃないためだ**いぶ**苦労した）を降りた先のボーデンアーチであった。

綺麗な水場に魔物の気配がしないその場は絶好の休憩所であった。

星空の見えるひらけた位置に薪を焚いて、獣除けの結界にこちらの一般的な旅人なら覚えておいて損にはならない小技百選という本に載っていた魔物とは別に野犬などの獣を追い払う物を書かれたマットを敷き、使い捨てのテントを設置した。

夕食代わりに残り物のまんまるカステラの半分と近場の水で焚いて白湯にして食べ

た。

焚いた火に土をかけて消した後、少しの星明りとガイア月の青い光（テラ月の赤い光はガイア月より弱い為そう感じた）が空から木々の間に差し込み少し不気味ささえ感じてしまうほどの夜は寂しさすら感じるものだから少し故郷に郷愁を感じながら眠りについた。

家に帰ることを夢に見なかったわけではないことを記しておく。

第20話

感傷に浸る前に己の状況を打破せよという言葉はいいものだ。

朝、無事に早めの日の昇りきらない時刻に起きて近場に生えていたコーヒーノキの実を採取した。

元々ここに訪れる際に目をつけていたが夜も近い時刻であったために採取は朝の早い時刻となった。

理性のタガを緩める作用のあるガイア因子の魂の塵というイーファの樹が根を通じて送る霧の下に生えている影響なのだろうか？

本来ならばコーヒーノキの実のなる季節ではないはずなのに、所々に白い小さな清楚な花を咲かせていたり、緑色やその中間の黄色や成熟の証である赤色になった実が木々ごとにばらけてなっていた。

植物に対してもこの作用、長く霧の下に留まれば私の精神に対して何らかの影響を与えることは明白だ。

そういえば、私がちちらに来た3月にはダリ村の方向で工事関係者の労働要因をトレノで募集する広告があつたが今頃は施設は完成間近かどうかなのだろうか。

その工場プロトタイプとして創られる黒魔の少年のことが気にかかるが7月頃に事故でクワンさんに拾われるまで海を1月ほど彷徨う羽目になるのはちよつといただけないことだが私にはどうしようもない。

実際、小型艇の事故で少年が海に落ちるのは幸運だったのか不幸だったのか。

ふとそうして霧についての考察を書き綴っている今だからこそ思いつくことがある。止まってしまふ少年の寿命についての問題なのだが恐ろしい考えがふとよぎる。

黒魔道士兵はガイア因子の魂の塵である霧を精製して作り出されたゴーレムなのだから再び霧を精製して何らかの形で取り込むということでは寿命を長引かせることは可能ではないのかと。

元のこれは私の知る物語の中で出た、テラの技術で無垢なクリスタルを老いたテラのクリスタルが取り込む形で星の寿命を延ばすことを参考に行っているがこれは一歩間違えば魂をむさぼる禁忌に等しい。

物語でこの事実を知った時に生まれるはずだった赤子を喰らつて生き永らえようとする悍ましいまでの生存欲に満ちた老害の様な印象をテラの星に抱いたものだ。

ガイアの魂を塵に等しい命のなりそこないとはいえそれを吸収する技術は狂気と言つてもいいだろう。

しかし、それは少年の寿命をもしかしたら延ばすかもしれない手段でもある。

人間も生き物を殺し糧を得て日々を生きるのだが、魂という取り返しのつかないものを使つてまでそうまでして生きていたいかと考えもある。

気分が悪くなるような話題は置いておくとして話を戻そう。

まんまるカステラを入れていた紙袋が破れない程度に成熟した珈琲の実を詰め込み、荷物に入れて野宿キャンブの後を片付けた。

そうして再び徒歩でリンドブルムへと歩き出した私は途中若いチョコボと追いかけてつこをするモーグリと立ち寄った森で出会った。

第21話

好きなモノと一緒にいる時間は限りなく尊いものだ。

こちらのモーグリは妖精の一種として扱われているが彼ら以外の妖精をまだ私は見た事がない。

精霊と呼ばれる魔物モンスターの一種は存在するのは本で見たので知ってはいるのだがまだそれらもお目にかかったことがない。

だから、彼らモーグリ一族と接触するときにはひそかに頭の提灯のようにぶら下がる真つ赤なポンポンにモフモフする機会がないかちよつと狙っていたりするのだ。

パタパタと動く可愛らしい蝙蝠に似た形の小さな翼と白くフワフワとした柔らかい毛に覆われているぬいぐるみのような手足や胴体は思わず抱きつきたい衝動に駆られること山のごとしだ。

そんな事やったらお巡りさんに通報案件なので我慢と自重を重ねて必死に堪えるのだ。

メネと名乗ったモーグリと彼に紹介されたチヨコボのチヨコはまだ年若い雛チヨコボが少し成長したくらいの大きさであった。

真ん丸おめめに黄色く鋭いクチバシと立派な2本の足、見事なまでの黄色い羽根で覆われた乗り心地のよさそうな丸い胴体の正体は間違いなくチヨコボ！

あとしばらくほどうすれば人を乗せることもできる大きさになるであろうチヨコは好奇心を抑えきれないのかこちらのバックにクチバシでチヨイチヨイとつつく様なそぶりを見せたりと大変かわいらしいチヨコボであった。

こんなに警戒心の強いチヨコが懐くのは珍しいとメネから称されたりもしたが害意なくこちらにすり寄ってくる子に悪い気はしないものだ。

離れるのが名残惜しかったがその日のうちにリンドブルムに着かなくてはならない為に携帯食代わりに大量に作っておいた保存のためにカバンに入れてきたサンドイツと今朝汲んでおいた水を食べた。

ついでに手持ちの新鮮なギザール野菜をチヨコに与えてみたり、それで完全に警戒心が薄れたのか手にすり寄るチヨコから離れるの本当にほんとくに名残惜しかった。

別れ際にチヨコボの森からメネが追いかけてきて「チヨコがどうしてもアンタにつ

てさ」チヨコの綺麗で立派な尾羽を手渡されたりして（手渡されたときにメネの手に肉球ポイ感覚があった）気分よくリンドブルムの地竜の門まで旅することができた。

その途中で湿原のほうに立ち寄ってみたのだが、ク族の沼に立ち入る前に靴が沼地独特の泥に足を取られかけ転びかけたため今回はあきらめてリンドブルムのほうに素直に向かうことになったのは余談である。

リンドブルム地竜の門をくぐる際に霧に覆われたこちらからくる旅人はあまりいないらしく、ブルメシア方面からたまに交易のための商人が旅費をケチってくるくらいであるらしく兵士から珍しがられてしまった。

門の中にくぐった後は上級兵士の人にピシヨップ氏に雇われた調査員としてリンドブルムの工業関係に関することを知りたいと伝えてパスを見せると

「トロツコに乗った先の城のエレベータを使って中層に行きそこから市街地へとつながるエアキャブへと乗ると良い」といわれた。

「泊まる場所としては商業区のエアキャブ降り場からすぐの宿屋がおすすだぞ〜」

とトロツコに乗った私に伝え忘れたと言わんばかりに叫ばれたのはちよつと恥ずかしかつたが。

第22話

技術都市国家リンドブルムの飛空艇などの機械工学は霧の大陸でも随一だろう。

トロツコに乗ってエレベーター乗り場に着了いたところちようど交代の兵士さんが中層に戻るそうなので同乗させてもらった。

少し到着するまでの間であったが飛空艇の霧機関を使わない新しい新型飛空艇についての聞いてみたが長年シド大公が構想を練りあと数か月のテスト飛行や安全性などを経れば7月頃に完成するはずだという情報を兵士さんからおしゃべりから得た。

もつと詳しく知れたかったのだが残念ながら中層に到着してしまいこれ以上は上司に怒られるとの言葉と共に去られてしまったので仕方なくエアキャブ乗り場までの道を城の飛空艇乗り場に飾られたシド・ファブール一世の銅像を道すがらちらりと見るだけでこの日の城の中の見学は終わってしまった。

高速でリンドブルム市街地の商業区に向かうエアキャブからの景色は確かに色鮮やかな様々な飛空艇の飛び交うさまや人々の暮らしが確かに豊かであるのだと示していた。

霧の大陸は心身に影響を与える霧に覆われているからして争いごとの絶えない地でもある。

それがこうまで発展しているのは高所に位置する霧の影響が少ない国の位置に霧の影響を抑えようと霧を使わない発明を考えたシド大公のみならず執政を担うオルベルタ様の優秀さが際立っていると云える。

リンドブルムの発展はすさまじいものがあるといえるだろう。

そう思考を回らしている内に商業区のエアキャブ乗り場に到着。

エアキャブ乗り場からすぐの宿屋に一ヶ月分の部屋代を支払い少量のチップを支払ってこの日のメインの買い物へと出かけた。

商店通りの入ってすぐのギザール野菜の新鮮なピクルスは自分で作ってみた時と同じく強烈な臭い（故郷の世界一臭い缶詰シュールストレミングとい勝負なんじゃないかな）を放っていて大量に積まれた荷馬車のそばには誰も近寄ろうとしないほどだ。

ゲスの肥溜め煮込みとはこのことかと思うほどだ。

近くによって（それだけで周りの通行人から勇者か変人を見る目で見られた。風評被害はなほだしい）店員のおばあさんから試食のために一つ買って恐る恐る食べてみたら一瞬ここで立ったまま気絶しそうになった。

さすがに丸ごと食べるような剛毅な（無謀ともいう）まねはできないので一番おいしい根の太い部分を角切りにしたものを口に入れたのだがそれでも凶悪なまでのにおいが口と鼻を直撃した。

ピクルスとは酢漬けだ。

酢特有の酸味に加えて凶悪な臭いのせいで口の中に入れたとたん唾液があふれてしまいそのせいで余計臭いが鼻を攻撃し飲み込むことを本能と喉と胃が拒絶する。

味はいいのだよ……味はな！

熟練の技だろうか自分が漬けたピクルスと比べてまるやかで食べやすいことは確かだ。

だが：しかし：臭いが：私のつけたピクルスよりも凶悪すぎるレベルを超えているもはや測定不能の四文字すら頭によぎるほどだ。

シャクリと音さえ立ててて劇物（毒ではないちゃんとした食べモノだ）を食べ切った私はもはや涙目だ。

しかし、しよっぱなから強烈なものだとリンドブルムの商店通りの入り口で食べたものがギザール野菜のピクルスとはこれからの生活どうなるのか。

この後、口を拭く為に使ったハンカチに臭いがうつつてしまう悲劇があるのだが焼却処分するほかないことを私は知らない。

第23話

ウインドウショッピングはいいものだ商品を気分で見極めるのが特にいい。

最初のギザール野菜のピクルスでだいぶ消耗してしまった体力であったが同じピクルス売りのおばあさんが売っているズッキーニやトマトのピクルスが非常に美味しかったのである程度回復することができた。

メインとして売っているギザール野菜のピクルスとは違いこちらはあくまでおまけとして売っているそうなのだが、正直強烈な臭いを発するギザール野菜と違い優しい風味のトマトのピクルスはサラダによく合いそうなほど良い酸味であるし、ズッキーニはマヨネーズと混ぜたら極上のタルタルソースになりそうだ。

ギザール野菜のピクルスを買ったらブラックジョーク交じりのお土産としてもとてもじゃないが悪趣味すぎて受けいれないだろうから、今回はトマトのピクルスと個人的に料理に用いてみたいと思ったズッキーニのピクルスを2種類3個づつ買い取った。

「毎度あり、また来てちょうだいよ」

かけられた声に軽く手を振ることで答え商店通りのさらに奥に位置する広場の道具

屋、薬を扱うアリスのシヨップと呼ばれる場所に足を進めた。

「いらつしやい、ゆつくり見ていつてね」

店のカウンターから店主であるう若い可愛らしい女性が声をかけてきたのでお目当ての品がないか尋ねてみた。

「この店にクポの実は売っていないかな？」

話しかけられた内容に少し思案した様子の店主は「それならこちらになります」とカウンターから出て階段を上った場所にある棚から甘い匂いのする丸い栗に似た形の木の実を見せてきた。

「珍しい品なので少々値が張りますよ。」

それはそうだろうクポの実は本来モーグリ族の好物で彼らしか食べない品だ。

タダで貰えた黒魔の少年の幸運と可愛さは私にはないモノなので提示された商品の値段を多少値切る程度は許されるはずだ。

そこからは値段交渉の時間であった。

売れ筋の商品からは外れてはいるが需要は確かにある品だ。

金銭を持たないモーグリ族の珍しい品との交換要員としての使い道のある品なのでからという値段は値切り交渉で良心的な額に落ち着いた。

値引き交渉の詫び代わりに今回のリンドブルムまでの旅に使ったポーシヨンの買い

足しを大量に行つたのでそれで勘弁してほしいところだ。

さて日も暮れかけたころ合いにいったん宿に戻りに夕食は工業区の店で食べると告げてエアキャブ乗り場で工業区行きのエアキャブに乗りしばしの空中からのリンドブルムの眺めを再び楽しんだ。

夕暮れ時特有のアカに色づいた屋根に夜間航空のための赤いランプと早めのライトをつけた飛空艇も乙なものであつた。

第24話

本当に美味しいものを食べる時は人は黙って食べるものだ。

工業区の居酒屋『死の宣告』はちようど夕食時のため大変にぎわっていた。

仕事帰りの労働者が集まる場所特有の客のがやがやとにぎやかな声が店の中に入る前から聞こえてくるほどだ。

運よく今回はカウンター席が一つ客が食べ終えたために座ることができたが次回から話早めに来るようにしなければ長い時間を待つことになってしまうことだろう。

せきについて早速ウェイトレスのお姉さんに夕食のために本日のおすすめとギザール酒、つまみに腸詰のゆでたものを注文した。

本日の居酒屋『死の宣告』、おすすめは「ヒートグラタン」口に放り込んだ瞬間にチーズとホワイトソースがとても良い味の火傷必須のアツアツのポテトグラタンだ。

ゆでた腸詰と共にギザール酒が早速、カウンター席に座った私の目の前に置かれる。

ホコホコと湯気を立てて美味しそうな腸詰の横にマスタードが少量盛られたものをさつそくかぶりついた。

ぱきゆりと音をたててかじりづくると肉汁が飛び出るで口に肉の味が広がる。

そこにすかさず、黒ビールにも似た色合いの液体の入ったジョッキに細かい水滴が冷たいことを知らせているギザール酒をグビりと音をたてて呷る。

まさにいうことはなし。

これぞ、仕事帰りの一杯という物だろう！

続いて運ばれてきたメインである「ヒートグラタン」は熱いから気をつけて食べようとしたのだが、ポテトとホワイトソースにチーズのからみかたが絶妙だったので思わず二口目を冷まさずに口に運んでしまい軽い火傷を舌に負う破目になった。

こうまで食いでのある料理も珍しい事だ。

道中「あそこは当たりはずれが厳しい店だよ」と機械技師だろう人物に道すがら言われたが今回は幸運なことに当たりの味に恵まれたようだ。

夕食を終えて店を出るとあたりはすっかり夜の街に変わっていた魔法道具の一種で国に管理されている街灯があたりを照らしていなければ足元さえもおぼつかず転んで

しまいそうなほどだ。

酒を飲んだことにより少しフワフワと足取りがおぼつかないが意識ははっきりしていたためにエアキャブ乗り場まで付くことができた。

一人酒は楽しく楽しめる量まで、帰りのためにセーブしておいて正解だった。

宿に着いた頃にはすっかりネムネムとあちこち頭が揺れること揺れること。

着替えもせずに（それでも部屋の鍵はしっかりと閉めて）その日はベットにダイブ。

久方ぶり（と言っても二日ほどの旅だったし道中も楽しめたから後悔はないが）のゆつくりと警戒せずに爆睡できる環境に明日の昼近くまでベットにうずもれる形となった。

第25話

演劇の終了の鐘の音や工場、開発の騒音この町はせわしない事だ。

翌日の昼12時遅すぎる起床の時間に昼の劇場区の演劇終了の鐘が私をたたき起こした。

まともな人物であれば昼食の間でもあるが今回は寝坊のために食いつばぐれてしまったが体を慣らすついでに昨日買込んだ食糧で遅すぎる朝食兼昼食の時間とした。

宿の厨房を借りてバターを塗ったパン（食パンが売られていたので酵母がないわけではない様子だ）2枚の間に生でも美味しいサニーレタスにハム、チーズ、固めに焼いた目玉焼きを乗せてズッキーニのピクルスを刻んだものを混ぜた手作りのマヨネーズで作ったタルタルソースを自分の好みの量に乗せて大きめのサンドイッチを作り上げた。

この日の予定は1か月後に訪れる予定のアレクサンドリア行きの飛空艇チケットを予約を入れておくことと工業区のほうで開発が進められているという新型水蒸気機関の見学を行うために機械技師たちとのアポ取りだ。

真面目な話だが、この国の主戦力でもある飛空艇団の新たな動力機関として将来が期

待されている水蒸気機関式のエンジンは国内外でもあくまで話のタネになる噂程度の代物に過ぎず現地に着くまでアポイントメントが取れずにいたのだ。

リンドブルムに到着しての兵士さんとの会話でもうすぐ実際に飛空艇を飛ばすほどであれば動力機関の水蒸気機関式のエンジンは完成されているのであろう。

ならばこの機会に実際に飛ばす予定の飛空艇が見れるかもしれないのだ。

期待するなというのが無理である。

だが、専門家でもない私はあくまでピシヨップ家雇いの一介の調査員に過ぎない。

工業区の機械技師経由で新たな水蒸気式のエンジンが拝めるだけでもラッキーととらえるべきだろう。

宿を出て最初の目的である1か月後のアレクサンドリア行きの飛空艇チケットを買い求めるためにエアキャブで駅員に聞いてみた。

「それでしたらリンドブルム定期飛空艇便がおすすですね」

なんでも飛空艇を使い手紙や荷物の運搬を仕事として扱う公共機関らしく一般の方でも予約さえ入れれば使えるらしいが、主に貴族が扱う代物のために身分証明がはつき

りしていないと門前払いされてしまうようだ。

私は調査員としての身分がはつきりしているために特別製のゲートパスを提示すれば簡単に請け負ってくれるだろうと言われ目的の地までのエアキャブを教えられた。

その後は門前払いされるようなトラブルもなくあっさりと1か月後のアレクサンドリア行きチケットを入手できたことを書いておこう。

第26話

わずかばかりの可能性でもすがりたいと思うのは勝手だろうか。

おやつ時には少し早い時間帯だが工業区に到着した。

昨夜、エンジンに関する話題で後方に設置するか前方に設置するかで論争となっていた（もう一人のほうが一方的ではあったが）機械技師の人に居酒屋『死の宣告』で話しかけ酒を少々おごることになったのだが、暇な時間帯になる3時ころであれば見学できるかもしれないぞと言われ工業区の飛空艇エンジンの工場に案内の約束を取り付けることに成功したのだ。

だが酒の席での話であるため明日になって酒が入っていたため憶えていないと言われてしまえばそれまでだ。

念のために手土産に商業区で売っていたプリン（魔物モンスターのほうではない方）の詰め合わせを買ったのだがどうやら無駄にはならなそうだ。

「よっ！時間通りに来たな」

昨日のことを覚えていた作業休憩時間中のマロロさんとヤコフさんまで迎えの為にろうか工場の前に立っていた。

こうまで歓迎されるとは思ってもなかったのだ。

大体にして機械技師の人物は職人気質で頑固なイメージが多いと私は思うのだが二人の話聞いて少し考えを改めさせられた。

曰く、技術を継承するにはそれに興味を持つてもらわなければならない。

見学に応募する人物は産業スパイが多いことは確かだがそれを恐れているのは若い奴らが興味を持たないんだとか。

それ相応に苦労しているんだなと感じた。

飛空艇のエンジンは主に霧機関が出回っているものだが、しかしこれからを担う蒸気機関に対して人体への影響がない点にこれからこれからの霧機関の製造労働者がこれからどうなるのか気になる場所である。

二人が務める工場では残念ながら霧機関のエンジンの製作が主で蒸気機関は城雇いの機械技師くらいしか内容を知らないと言われてしまった。

「まあ、城の技師に知り合いがいるからそれに聞いてみることにするか」

マロロさんの知り合いの技師が城に努めているそうなのでそのついでお目当ての蒸

気機関のエンジンを拝めそうである。

作業終了のベルが鳴り響く中、工場を案内してくれた二人に礼を言つて帰りにまた居酒屋『死の宣告』により二人と少々飲み過ぎになるくらいに飲んで勘定をこちらで持つことになった。

後日、食事に何度か訪れて交流を深めながら城の技師からの連絡待ちにリンドブルムの劇場区で毎日行われる芝居をちゃんとチケットを買つて観劇したりした。

リンドブルム滞在7日目にマロロさんから連絡があり、城の技師と話が付き条件付きで見学が可能になった。

第27話

城の重鎮にはかわりたくなかったのだが…仕方あるまい。

やはり最新の蒸気機関は国の重鎮により一端の技師程度では見学の許可が取れないらしく技師長のゼボルト殿から国の発明のすべてを担うシド大公の耳に入ったらしく城の客室にて非公式の面談を行うことになってしまった。

面談は2日後、つまりリンドブルム滞在9日目にして国の御大将とかかわることになってしまい、ちなみに拒否権はと聞いてもあると思うかという城からの面談の日程を知らせに宿へときた下級兵士からの目線で黙らされたに等しい。

私が一体何をした！

と嘆いていても仕方がないので、国のお偉いさんにあう為にある程度見形を整えて2日後の会談に挑むことになった。

結果的に言うとそのほど怖い事にはならなかったとだけ言っておこう。

城に着くや否や案内された先にオルベルタ様と技師長のゼボルト殿を伴った立派な白い髭が特徴的なシド大公殿下と話し合いとなった。

ビショップ家の調査員としての身分が保障されているので試作品の蒸気機関のエンジンだけの見学であれば可能だとシド大公殿下の寛大なる配慮で可能となったが、かのヒルデガルド号1号機が作られる前に蒸気機関のエンジンを搭載した小型艇のテスト飛行の運転に付き合うことになってしまった。

まさか蒸気機関エンジンのテスト飛行に付き合わされるとは思ってもみなかった。

面談のさなか蒸気機関のエンジンの構造云々の質問をされたりもしたがトレノでの貴族の道楽に付き合わされて小型艇の運転をしたり（運転を振られたときは無茶ぶりもいいところだと思いましたがプロの航海士が乗り方について教えてくれたし、乗った時の感覚的にはバイクと似ていた。）した程度だと正直に答えた。

内部構造については専門家でもない私にはさっぱりわからん事だ。

それを聞いて大公殿は深く考えを巡らせるかのように腕を組み厳しい面持ちとなったりもしたがその直後にちよつと思いついたとばかりの勢いで試作品の小型艇のテストパイロットに選ばれてしまうとは人生とはわからないものだ。

素人同然の私になぜとも思い無礼を承知で質問したのだが、シド大公曰く、いずれ飛空艇を市民の間にも浸透させてリンドブルムでの飛空艇技術を世界に広めたいがためにその広告塔ともなるちよつど良い最新鋭の小型艇のパイロットを探していたのだという。

つまりは蒸気機関の新型飛空艇の広告塔になる小型飛空艇を外国で乗りこなす人物が必要になってくるのだ。

しかし、軍の人員ともなる操縦士から常の外国への出張を余儀なくされるこの仕事に貴重な人材を割くことができずにいたためそのちよつど良い人材に私が選ばれたとのことだ。

柵から牡丹餅とはこのことか私は最新鋭の小型飛空艇操縦士として選ばれてしまったのである。

第28話

さて件の新型小型飛空艇に関してだがどうにも困ったことが起こった。

どうにも初のテスト飛行で性能テストのつもりでリンドブルム上空で遊覧飛行と合わせて重力魔法^{グラビティ}で自身を小型飛空艇に引っ張られるように調整してからの曲芸飛行で一回転や螺旋飛行からの直角急カーブなどで遊んでみた。

そうしたら当たり前だが、あまりにも小型飛空艇の一生にお目にかかるかどうかの性能の限界を引き出し過ぎてしまいエンジンやその他諸々の機関部がオーバーホール直前まで追い詰め過ぎた。

これには各国での宣伝飛行を依頼してきたシド大公殿下の驚愕に満ちた顔、小型艇の調整や修理すべてを請け負うと言ってくれたゼポルト殿も苦笑い、オルベルタ様のあきれた様な顔と共に三者三様に困った感じであった。

「やり過ぎたでしょうか？」

さすがに改修寸前の全面オーバーホールは笑い事で納めるほどの事ではないだろうし、もしかしたら宣伝飛行士の件は無かった事（つまりは遠まわしのクビ宣告）にされ

てしまうのだろうか」と申し訳ない気持ちでいっぱい聞いてみたら。

予想外にこれからお付き合いのほどよろしくと言われこちらが吃驚してしまった。

曰く、「小型艇が自壊寸前までに追い詰められたことは問題だが」

「これから作る大型艇の為に蒸気機関エンジンの本格的な性能限界の情報が取れた事は予想以上にそなたの飛行士の腕前が本物であったことが証明されたことで誉れ高い事だ」

とシド大公爵下が仰った。

また、「小型艇の新たな技術開発やさらに性能を引き上げた専用艇になってしまおうが」
「技術者としてはまだまだ開発の余地があることは嬉しい事なのだ」

と教えてくださったのは技師長のゼボルト殿だ。

そして、「それにかかる予算等の捻出でこれから経理および統治の計画都合を練り直さおさなければなりません殿下」

と苦労を苦と思わず臣下として支える者の面持ちでシド大公をみつめるオルベルタ様がまぶしく思えた。

遠慮も容赦もなく新型小型艇を自壊寸前まで限界性能を引き出されたのは飛行士の腕前が良かった為と自壊寸前であり完全な全損の墜落機体にならなかつたのはそこを見極めるだけの直感の持主であつたことが高評価だつたようだ。

もしかしたら機体の自壊でリンドブルム上空から命綱無しのバンジージャンプもといフリーフォールからの潰れたトマト仕様の物体にジヨブチェンジしていたことが私には笑い飛ばすだけの胆力はなく苦笑いのみままだ固まることになつたのだ。

とはいえ新型小型飛空艇は全面改修のち恐れ多い事に私専用となる頑丈で操縦性に入れた専用小型艇に生まれ変わらせることが決まつたのである。

第29話

日々を穏やかに過ごしていくにはここの日常は未知に満ちすぎている。

前回の最新型小型艇性能テストからはや3日たったある日のことだ。

3日間は各国への新型蒸気機関式のエンジン宣伝のために専用小型艇が本格的に作られるので私が当初、乗船予定であったアレクサンドリア行きの飛空艇のチケットのキャンセルやアレクサンドリアまでの南ゲートから航空ルートの確認などで時間を過ごした。

リンドブルム滞在13日目、そろそろ6月になるうかという日に唐突に城への召喚（この場合は魔法じゃないが）命令書を持った兵士さんが宿を訪ねてきた。

受け取った命令書の内容は頑丈性と操作性に優れた専用艇の試験飛行のために今日の午後には城に来るようにと書かれていた。

流石ヒルダガルデ3号機を3日で突貫工事でありながら作り上げた技術か…もう専

用小型艇を作り上げてしまったようだ。

いそいそと小型艇への搭乗の準備に取り掛かりなんとか見形を整えて城へと急ぐと兵士さんから飛空艇ドックの方に向かう様に案内された。

てつきり工場の方に行くのかと思いきやすぐさま飛行テストが行えるようにとドックの方を選んだのだろうかと考えながらエアキャブ乗り場から降りてすぐに、オルベルタ様がシド大公とゼボルト技師長が城の正面入り口近くであーだこーだと話し込んでいた姿が目に入った。

「おお！待ちかねたのじゃぞ」

「遅かったじゃナカですばい！」

シド大公殿下とゼボルト殿がオルベルタ様から逃げるようにこちらへと小走りで近寄ってくる。

お二人の背中から「反省してないようですね」と黒々としたオーラが何かを背負つてするような雰囲気のあるオルベルタ様が「急な召喚命令申し訳ありません」と挨拶と共にこちらへと向き直った。

「小型艇の改修作業、もとい専用小型艇へと改造工事が完了しましたので早速の飛行テストの依頼をお願いしたく今回はお呼びしました。」

貴方様にはご足労おかけしましたなど目線での労りが身に染みだが技師長と大公殿下へと目線がうつると途端に場の空気が氷点下に下がったように感じた。

「まあ、少々今回はお二人が羽目を外して予算を度外視なさつての改造工事となりましたのでこの速さなのですが……ね。」

オルベルタ様からの凍るような視線でギクリと身を竦めるお二人がまるで悪戯がばれてどう誤魔化そうと考えてる悪ガキのように見えてくる……シド大公殿下に関してはこの時は威厳のかけらもないように見えてしまう。

「そ、その点は深く反省しておるわい！」

シド大公殿下は咳払いで空気をぐまかすところちらに向き直った。

「しかし予算に見合った物以上の出来だと今回の飛空艇は保証するのじゃ」

ドックへと足を進めると船着き場に頑丈そうだが藍色の船体に所々金の装飾が施されている流線型の機体優美な見目にリンドブルムの赤い天竜紋が刻まれた小型艇が止められていた。

第30話

瑠璃色の鳥を思わせる機体はどこまでも私の要求にこたえてくれる。

シド大公殿下直々に案内された専用飛空艇を目にしての感想は思ったよりもごつくなくかといって華奢な雰囲気でもなく、まるで優美な藍色の夜空がそのままスピード自慢の猛禽類に変わって魅せたかのような姿であった。

「気に入ったようじゃの」

ハツと魅入っていた意識が戻った時にはニコニコとこちらの様子を意地悪くご覧になっていた殿下に少々顔を赤らめる羽目になった。

乗ってみての感想も素晴らしいの一言で片づけるのはもったいないのでちよつと語ってみようか。

飛行テストとして前回ののように遠慮なく機体の性能が限界まで引き出せるように無茶な曲芸飛行も交えての運転となりますがよろしいでしょうかという私の言葉に何や

ら自信ありげなほほえみと共に3人が三者三様にかまわないとの返事を貰えたので色々をやつてみた。

前回と同じく機体へと自身が引つ張られるように細かい調整をした重力魔法グラビデによる固定作業から始まり、急発進からの急加速でリンドブルム上空まで駆け上がるように飛行してそこで急停止して上空に一時的にとどまった。

ここまでの操作で前回は多少なりともエンジンから嫌な音が多少聞こえたが今回は聞こえずかなりの余裕を感じて少し無理な運転を重ねてみた。

前回と同じメニューの一回転から螺旋飛行からの直角急カーブに加えて急降下の急上昇を交えての蛇行型の飛行など普通なら無茶もいいところの内容の操作に素早くこたえてくれるこの機体の素晴らしさよ。

エンジンの不調音も特に聞こえず問題なく通常の飛行に加えて曲芸飛行が可能であったのはひとえにシド大公率いるリンドブルム技術者が前回の失敗から相当な試行錯誤の末と予算オーバーするほどの技術と高価な部品等の大盤振る舞いに違いあるまい。

地上に降りてドックへと戻るころにはフワフワとした気分であつたことは間違いない。

「どうじゃ。すばらしい出来であろう！」

疑問形の答えではない確定した素晴らしいさを誇るようにシド大公殿下は小型艇から降りた私へと問いかけてきた。

もちろん文句のつけようもなく素晴らしい機体であったことは確かだ。

しかし、私はまだこの機体の名前を知らないのだ。

機体の名前についての質問にシド大公殿下は勿体ぶるかのように軽く咳払いをしてこう告げてきた。

「この新型小型艇に名前らしい名前はまだついておらんのだじや」

「お主の専用小型艇となるのだからお主自身が名付け親となるべきだと思つてな」

「今すぐにつけようとせずじっくり考えるとよい」

「新型蒸気機関式のエンジンの飛行艇お披露目の7月まで時間はあるのだから」

あとでシド大公殿下の言葉にゼボルト技師長がこそりとこちらにだけ一言。

「大公殿下が名付けると必然的にみんなヒルダ様のお名前になるから皆から反対されたい」

番外編：突発的事故的結果 1

あれは事故、事故なのだと言いつつ述べてみたいがそうもいかなそうだ。

故郷への帰還のための転移魔法検証実験その2について。

今回旅先というよりもリンドブルムの泊まっている宿では帰還のための検証実験は常識外れなことをしでかす魔術師の一端でもある私でも迷惑を鑑みて行えない。

なので急遽、不可思議な縁で仕事関係の上司の一人となったかのリンドブルム大公殿下であらせられるシド大公に自分が研究している空間移動系の魔法の検証実験をしたのでどこか広い安全な場所はないでしょうかとダメ元で聞いてみたところヒルダガルデ大公夫人が普段魔法研究に使う仮施設を紹介してもらった。

機械工学科を専攻としたシド大公と違いシド大公夫人ヒルダガルデ・ファブール女史は魔法関係の扱いに関しては霧の大陸でも屈指の実力の持ち主で、特に呪い（まじない or のろい読み方はこの場合はどちらでも可）の分野に秀でていることが国内外ではとても有名なことだ。

その大公夫人が魔法研究に使った施設、失礼ながら最初は本当に使用しても大丈夫なのかシド大公に聞き返してしまつたほどだ。

魔術師、魔導士、魔法使いあるいは呪術師など言い方は様々だが魔術または呪術を操る人物は自分の魔法、魔道、魔術、呪術に関することに關しての研究施設に立ち入られることをことごとく嫌うものだ。

結果としてはその心配は杞憂といふべきであつたのか。

大公夫人のためにシド大公殿下がもとほリンドブルムに住んでいた今はトレノ住まいの貴族の屋敷を買い取り流用し用意した複数ある施設の一つで長年使う機会がなかつ老朽化で取り壊しが今月の終わりに行われることが決まつたものである。

現在使われている工房は城の内部の大公夫人の部屋で充分であつたことが判明したためにこの仮施設をどうしようかオルベルタ様やヒルダガルド大公夫人も交えた話し合いの結果、有望そうな研究者に取り壊されるまでの貸し出しを考えついたそうさ。

場所も商業区、工業区、劇場区のリンドブルムの主要な場所からの外れており市街地の外れに位置する不便な場所であるが周囲に人が住んでいないためちよつと危険な魔法を試しても被害が出にくいので信用ある研究者であれば有効活用できそうだとのこと。

そういう話であればこちらも遠慮なく紹介された施設を使用できるものだ。

地図を頼りにたどり着いた屋敷に早速結界のための魔石を各所に準通りに置き、邪魔が入らないようにしてからの転移を安定して行うための魔法陣を2日間のリンドブルムへの旅路で魔物^{モンスター}を倒しながらの作業で作り上げた魔石入りの顔料を用いて一番広い部屋であった玄関ホール^{エントランス}の床に描いていく。

前回と何ら変わらない実験内容では進展がないので今回は肉体ごとの転移に挑戦してみようと思う。

故郷への帰還が最終目標の実験なのだ。

肉体を持たない幽霊状態で前回は成功したともいえるが今回は肉体つまり質量を伴う転移だが失敗すれば命にかかわるがやめるわけにはいかない。

これが成功すれば故郷への帰還という望みがまた一つ叶う可能性につながるのだから。

過程はこれまでと変わらず、最初に肉体から離れて霊体での転移先へ安全性の確認そして肉体が転移しても即死しない環境であれば一度転移を中断して肉体に戻り、今回の実験内容である肉体込みの転移を行う。

前回と違い貴重なエリクサーを大量に絶えず飲み干し続けることで魔力を瞬時に全快させることで魔力を限界まで封入した形で魔法陣を活性化させて前回とは違う座標の転移先への道筋を安定させることに成功させた。

転移酔いは前回の紫フードの少年の言葉から転移の際の魔力が少なかったために危うく帰還できないⅡ死亡フラグ案件へつながっていたと考えられた。

エーテルを1つほど飲み干すことで全快する並みの魔導士より保有魔力量が規格外すぎるとトット教授に称された私の魔力をエリクサーで絶えず全回復させる形でようやく転移魔法を安定させることができるのだから次元転移がいかに禁忌の魔法であるか思い知れることだ。

感覚にして4：いや5回分くらいは自分の魔力の底をつくような脱力感に見舞われた。

「デジョン」

発動のためのキーワードは前回と変わらず、高いところから落ちるような感覚の浮遊感と渦に吸い込まれるような酩酊感に包まれるような形で目の前の景色が水のように揺らいでいった。

波の音が最初に私の耳に聞こえた。

水のように揺らいでいた目の前の景色はまぶしい太陽と白い砂浜に漣が静かに打ち寄せる淡い水色から遠くの深い静けさに満ちた青が綺麗な海がキラキラとまぶしく反射するさまが目映った。

綺麗な光景に目を奪われているわけにもいかず周囲を警戒する。

砂浜から草原に森の景色が見えるが草原の一部に灰色の道、つまりは道路の様なものが見えた。

帰れたのかと浮かれた意識が異物の様なものが近くにあることをとらえた。

あちこちに砂浜に紛れて赤い鰭の様なものがウヨウヨと砂の中を泳ぐ様に紛れている。

目視できる範囲で魔物モンスターがいるためにどうやら故郷への帰還は今回も無理だったようだ。

がくりと肩を落とした。

期待させるような光景に浮かれていただけに落ち込みも半端ではない。

とりあえずは一度肉体に戻ろうか。

道路の先に街の様なものが見えていたが目に映る範囲でこちらに見える人影もな

かったために遠慮なく帰還のために魔力を練り上げて術式を組み上げた。

道路があるということは文明のレベルは高く観光であれば何かしら期待はできそうだと気分を切り替えた。

もうすぐ魔法で移動する予兆だろう手が薄く透けて見える霊体時に後ろでザパアと音をたてて誰かが陸に上がってきた。

「お、お、お、おとおおおお……。」

金髪のツンツンとした鶏冠のような髪型の幼げな、しかし元気が有り余っていきそうな少年が海パン姿で振り返った先にいた。

「お化けだあああー！うわああああー！」

彼の少年の叫びと共に目の前の景色が水のように揺らぐ、訂正する暇もなく目の前から消えて見せたさまはまさに幽霊だろう。

あの時の私は霊体だから少年の表現は間違っではない……いないのだが……なんか釈然としないし、憤懣やるかたないとはこのことだろうか？

番外編：突発的事故の結果2

気まずいことこの上ないし、申し訳ないという気持ちでいっぱいだ。

仮死状態の保護結界越しの肉体へと霊体が宿り目を再び開けるまでの感覚はどこか眠りから目覚める時に感じる眠りから目覚めたくないという抵抗感を覚える。

それは先ほど使った魔法による副作用の一部だが幸いというべきか前回よりも意識ははつきりと肉体の動作にずれなどが感じずに戻ることができ、前回の転移後のありさまは船酔いと車酔いに同時にかかったかのように目の前がふらふらとしたり後遺症が残らなかつたのが奇跡のように感じられたものだ。

魔力は残り半分といったところか、勿体ないが即座に回復させるためにエリクサーをあおり今度は肉体ごとの転移へと移る。

立ち上がり魔方陣の中央で座標に揺らぎがないか確認後、転移に使って減った分の魔力を注入し直す、やはり相当の数のエリクサーを消費することになってしまった。

魔方陣からあふれる様に魔力光があたりを照らし時刻は夕方、あちらとこちらの時間

帯が（あるいは時の進みかたといった方がいいたろうか）一緒だった場合はすぐに町で宿をとらないといけない時間帯だが間に合うだろうか？

「デジョン」

物体の転移は初の試みだ。失敗したら目も当てられないほど悲惨だが…。

魂が置き去りにされるなどたまったものではないが今回は期待できそうだ。

転移特有の水の揺らぎに似た空間のゆがみが視界を揺らした。

「ぎやああああ！消えたと思つたのにいゝ〜！」

あたりにこだまする子供の悲鳴が先に耳に届いた。

「またでたああー！お化けええ〜！」

目の前の光景は先ほどと同じく太陽がまぶしく快晴と言つていい空模様。今回は肉
体込みの転移であつたせいだろうか先ほどと違いうだるような暑さが私に汗を流させ
る。

涙目でこちらに怯える金髪の少年には気の毒だが……絶好の海水浴日和の空模様だ。

「転移の際の時間経過は先ほどの少年の言葉から消えた同時に現れたの言葉である程
度予想が付くが今は考えに耽るよりも目の前の少年からおびえさせずに近場の街の情
報を得なくてはならないと少年の見事な怯えつぷりに軽く笑いの発作を抑えながら話
しかけた。

初めはひどく警戒され話しかけただけなのに目が合わせてくれないには堪えた。

根気よく話しかけることでお化け扱い不審人物から普通の人間だとわかつてくれた
ときには太陽は真上、時刻は昼に近いのか少年の腹の音があたりに響いた。

少年は海から出て私のすぐ横の岩の陰から上着を引つ張り出すとそれを羽織り、近場の街バラムへとつながる道路への道すがらいろいろと話してくれた。

聞いた話の内容に驚いた内心をひた隠し、顔は柔らかい笑みの形で固定しなければ口の端が引きつりそうだったことは確かだ。

少年は近くのバラムという町に住むゼル・デインといい、セントラ地方の孤児院からバラムの家族に引き取られたばかりでまだ友達がおらず一人で鍛錬という名の海水浴代わりに街から遊びに来たらしい。

「なあーあんたママ先生と同じで魔女なんだろう！」

どうやら目の前で現れたり消えたりといった魔法を使用したせいでお化けという認識から知り合いの魔女と同族とみられているらしいとんだ勘違いなのだがキラキラとした目線がまぶしい。

「町の皆には黙っておくから魔法について聞いてもいいか！」

ゆすつてきたでも、ねだつてきたでも同じ漢字だが前者は強引な雰囲気だし後者は自分の魅力が分かってやってる人物のように感じるから不思議ものだが、少年に強引に聞こうとする雰囲気は感じないしわかっていてやっているというわけでもなさそうだ。

少年は期待に満ちた顔でこちらを見て魔法に関する話を強請ってきた。(読み方はどちらでもこの場合は間違っていないだろう)

さてどうしたものか…。

少年には悪いが確かにこの世界^Fにおいて^Fは疑似魔法という物というものがあるのは知^Fつてはいるが本物の魔法^Fが使う魔法の威力とは段違いであることが判^Fっているが、あの世界とは魔法^Fに対して世界観^Fが違う為に威力や効力の差が分からないのかどうか魔法の話ができないのだ。

道路につくまでの道すがらで出た魔物^{モンスター}が使うのは技ばかりであったし、唯一浜辺で魔法を使うであろうグヘイスアイに出会わなかったので検証の隙もなかった。

「やっぱり教えてくれないのか…。」

こちらが言いよんどんでいるとやはりと予測していたかのようにダメ元での質問であったのか、あつさりと諦めるような感じの雰囲気^Fにいつの間にかなっていた。

「ママ先生も魔法のお話になるとおんなじ顔になったしな…。」

ウンウンと頷く様に首を振ると一人で納得したのかあつさりと話題は変わり旅の目的についての質問へと変わってしまったこちらが拍子抜けするほどに見切りが早いものだ。

少年は話し上手で私が観光目的で旅をしていると話すと少年が今住んでいるバラム

についての話題で特に盛り上がった。

観光が目的なら駅前前の土産物屋が買い物するのにおすすめだとか、泊まるんだったら青きバラムホテルだし飯もとつてもうまいだとかいろいろとこちらが欲しい情報を街につくまでの間の歩きながらの話で大体手に入ってしまった。

「じゃー俺これから家で飯だから」

「またなア〜」とドップラー効果であるかのように耳に残る目の前からあつさりと去つていった少年の声と後ろ姿に苦笑いしつつ、教えられた駅前のお店で買い物をするため町の入り口から足を進めてまずはホテルで部屋をとることにした。

ホテルの入り口でこちらの貨幣があちらの貨幣と同じギルであるが使えるのか悩んだが出してみたところ、ホテルの店員は「ずいぶん古い貨幣ですね」物珍しいモノを見たという雰囲気です。100ギル硬貨を受け取り部屋の鍵を渡してきたので問題にはならなかったようだ。

バラムホテルでとつた部屋の眺めは素晴らしく上から眺めでは先ほどまでいた白い砂浜からエメラルドグリーンが眩しほどの太陽光を反射してキラキラと輝きさらにそこに先ほどは見えなかった位置にあったのはサンゴ礁だろうか一部が赤色に輝いている。

この光景だけでも100ギルの価値はあつただろう。

番外編：突発的事故の結果3

音の記憶というのは最初に忘れてしまう場合が多いそうだ。

久方ぶりの車の走る音など都市独特の騒音は思ったよりも騒がしいものがあつた。

これまで霧の大陸で回つた場所は主に山や川といった自然物が多く、霧に覆われた大陸で人工物特有の騒がしさに煩わされた記憶は特になかつた。

リンドブルムは技術大国と言つても騒音方面は工業区から離れた場所である泊まつていた宿には関係皆無であつたし、まさか最初の異なる世界での騒音の記憶があFの世F界9ではなく、この世F界8になるとは予想出来ようはずもない。

ゼル・デイン少年からバラムへと案内された道すがらに車はこんなにかましいものだったかと再認識したほど飛行艇は音に關しては車ほど五月蠅くは無く、しいて言えば飛行中のプロペラ音だがそれほど会話を妨げるものではなかつたと私は思う。(まあ：人それぞれだろう)

駅前1の土産物屋に足を進めて楽しみにしていた海辺特有の商品を眺めて数種類の干

物と合わせて今朝とれたばかりと紹介されて鮮やかなターコイズブルーが印象的なバラムフィツシユ（煮ても焼いても揚げてもどんな調理でも旨いと太鼓判を押された一品だ。）を丸々一匹買い取って、この世界を軽く観光し終わった日に料理することを楽しみにした。

ふと隅の方にレコードが陳列されてあった。

何気なく眺めてどれもこれも見た事の無い曲名でどれが良いのかはわからなかったが一つだけ知っている曲名のレコードを見つけて記念にそれを購入することにした。

「Eyes On Me」と綴られた表紙のピアノの前に佇む黒髪のきれいな女性が印象的なレコードだ。

故郷の実家の方にはCDもあるが今自分の手持ちに余裕もあるので少々お高かったが買うことに決めた。

久方ぶりに故郷にも通じるものがあつたことに懐かしかった思いもあつたしレコードであればあの世界でも機材があつたから楽しめるはずと考へての購入だし無駄遣いにはならないはずだ。（修学旅行テンションで買い求めていたとは言えないが…。）

それから数日、正確には初日と合わせて6泊7日ほどバラムホテルを拠点に海で貸し出し用の水着で遊んでみたり、（ゼル・ティン少年とたまに時間が被ることがあつたので

遠泳の練習に付き合わせられ彼の底知れぬ体力にこちらがばててへ口へ口になったりした。）

同じく貸し出されていた釣り竿で浅黒い肌の体格のいい少年といつ間にか並んでスポーツフィッシングで数を競っていろいろと釣り上げた魚をそのまま戦果にしたり、「今日は楽しかったもんよ！また休みに釣り勝負したいもんよ！」と特徴的な口癖であるの子はもしかしたらと思つたが名前を聞きそびれてしまった）

バラム島を一周する形で周辺の魔物相手に魔法の威力を確かめたり、（魔物の使う魔法は弱く感じた）

あの世界の魔法防衛増強魔法で簡単にレジストできそうだがこれが世界観の補正なのかはわからないが私の使う魔法はこの世界干渉を受けなかったわけではないが威力は普段と変わらなかつたがいつもよりも魔力が操作しづらかつたなど感じた。

そして、この世界で過ごした6日目の夜にすっかり数日で仲良くなつて水遊び（ゼル・デイン少年曰く「鍛錬だ！」と訂正されたが）に誘われるようになったゼル・デイン少年（「ゼルでいいぜ。」と呼ぶように強請られた呼称は情が移りそうだからからかい交じりに誤魔化してしまつた。）に「俺ん家で飯食わないか？」と夕食に誘われた。

すっかり楽しんでこの世界に入り浸つてしまひそうでしたが、こちらはあの世界ほど

魔法研究は人間の手では打ち止めの状態で種族魔女でなければこれ以上の魔法系の知識は得られないと判断し明日の夜にでも帰ろうかと考えていた時に誘われたために最後の思い出にふさわしいと考えて誘いに乗ることとした。

「今日はダメだけどね。明日の夜であれば時間が空いているよ。」私の都合を話すと、「ヨツシヤアア！絶対だからな！」と念押しのようにガッツポーズの後に指さした。

苦笑いと共に「約束は守るさ。」と告げると満足したようにうなずき名残惜しげにこちら手を振りながら帰っていった。

その日は荷物をまとめ、数日で釣り上げた魚と初日に購入したバラムフィツシュを明日の土産にこちらで手に入れた調味料でホテルの厨房を借りて料理することにした。

そして翌日、早朝にはホテルを引き払い荷物と共に人の目の無い森の中で魔方阵を敷き帰還のための術式を粗方済ませて荒らされないように魔物除けもしたころにはすっかり日も暮れて夕日が海面を照らす赤から海面の光が美しく紫へと変わるコントラストが素晴らしい時間帯に変わっていた。

約束の時間にはまだ早いだろうが待たすのは申し訳ないと考えて先に待っていたが時間ピッタリとなる頃にドタバタと擬音が付きそうな勢いでバラムの入り口にゼル・

デイン少年が現れた。

時間ギリギリの遅刻にはならずとも到着は彼らしいと言えばそうなのかな？

デイン家についた当初は思いのほか年上のゼル少年の友人に驚いた様子のゼル少年のママさんはこちらが丁寧にあいさつすると気を取り直したのか笑顔で迎え入れてくれた。

デイン家での夕食は手土産として釣り上げた小魚を南蛮漬けにした物とバラムフィッシュを丸々一匹、香草焼きにしたものを渡したためにちよつとしたパーティのような豪華な夕食となった。

夕食も食べ終わり、ゼル少年はジュースで私やゼルのママさんはお茶で一服を入れた時に実は今日でバラムから別の街に行くということ打ち明けたところゼル少年は非常に残念がりもつとこちらに居られないのかという拗ねたように言ってきたがそうもいかないものだ。

名残惜しいのは確かだがそれ以上に私には帰らなければいけない場所があるのだから。

涙目でこちらを家の前で見送るゼル・デイン少年に「ありがとう。物知りゼル少年、私

は君のおかげでこの町の色々な良い所が分かったよ。」との言葉にぼかんとした様子だったが、「今度また来たら俺ん家にとまれよ絶対だからな！」とまたびしりと擬音が立ちそうな指差しに、私も「そうなるといいね。」の一言を添えて目の前からあらかじめ指定しておいた魔方陣までの空間転移をゼル少年の目の前で行った。

「テレポ」

折しもこの日はこの世界の日付で8月31日、故郷であれば夏休みが終わる日でもあった。

第31話

さて、どうしたものかはテンプレート過ぎる言葉だな。

大公殿下から委託された専用小型艇の名付け親の権利にありがたくもここ数日は頭を悩ませる日々である。

リンドブルムは今日も青い大空に様々な飛空艇が上空を飛び交っている。

滞在期間が半月を過ぎ、ビショップ家に向けての定期報告の手紙とレポート、それと合わせてトット教授への手紙と翻訳内容のまとめたものを指定された特注の宝石箱を思わせるような特殊魔方阵があらわれた銀色の魔道具の箱に収めた。

これは最近空間移動系統の魔法、魔法名テレポを物体に宿らせることが成功したために作り出すことに成功したテレポボックス。

この銀色の魔道具の箱は中に入れたものを対になる箱に送ることができる、箱のふたに赤黄青緑の順で魔石がはめ込んであり赤は起動時に、黄色は転送中、青は送信済み、緑は受信時に光る魔石だ。

バックを利用した定期報告は荷物を安全に届けることは信頼に値する人物しか利用できないためにいづれ、私が故郷に帰った時に困ると思ひ開発に力を注ぎ現物を作り上げるに至ったものだ。

試作した段階で物品の転送自体は問題なく成功し今現在は私名義で特許出願済み。

実際はレッドローズのテレポットに使われている術式の資料にアレンジと改良を加えたモノを物体のみに焦点を絞って小型化した魔方陣を仕込んだ遊びで作った1対の手品ボックスをトット教授に説明書付きで送ったものがビシヨップ家当主様の目にとまったらしいいくつかの間にか特許を出願させられた。

事後報告は良くないと思うんだが特許を取れとの上司の命令に流された自分が憎いし、いささか安易に既存のものに改良を施したことを反省するべきか。

個人の利用ではテレポボックスのために大量の魔石と相性の良い魔法銀ミスリルが大量に使われているために目が飛び出るほど高いのでお勧めはできないが金に糸目をつけない瞬時の取引ができるためある程度の水準の豪商や貴族に飛ぶように売れるため需要は切れることがない。

一箱、単価10000ギルは暴利を貪るにも程があると思うんだが…それ程に価値があると言ったのはその場でオークションの真似事で値を釣り上げた鑑定のために呼ばれた商人組合ギルドが悪いと私は責任転嫁してみる。

報告のために何度かやり取りしテレポボックスはビショップ家では当たり前になる日も近い。

技術革新に手を貸したせいで一部錬金術や魔道具製造方面に名を売ることになってしまったがこれがのちの憂いになるかどうかはまだわからないといったところだ。

さて目下の問題は大公殿下から提案された専用艇の名前に関してだがこれに関してはいい案がすでに2つほど思い当っていた。

7月のお披露目まで秘密ではあるがその時までには絞り込めるだろう。

それよりも困ったことがある。

大公殿下がブリ虫に変化した呪い事件についてだ。

覚えている範囲では7月頃に大公夫人に酒場での民間人女性との逢瀬デートを知られた為に怒った大公夫人にシド大公がブリ虫に変化する呪いをかけられ、その日の内に大公夫人がヒルダガルダー1号機を使った盛大な家出を行ったことまでは知っているのだが、6月の初めまでにシド大公殿下が城下町にいらした気配や噂話もなく仲睦まじい夫婦中であらせられるといった話しか聞かないのだ。

このまま何事もなく6月が過ぎ去ればいいのだが…人生そううまくいくわけがなく。

わが目を疑うとはこのことか！と思わず現実から目を背けたくなる。
宿の前にいる人物のせいだ！

大公殿下…、なんであんた城下町に降りてきているんだ！

第32話

臉を閉じて手のひらを額に当てて考える本^{マジ}気でどうしてこうなったと…。

宿の前にいらつしやつた立派な髭の持ち主（間違ひなくシド大公殿下本人だが）に内心肝を潰された心地を味わうことになったのはいうまでもなく、（護衛とか政務とか言いたいことはいろいろあれど）城下に降りてきた理由を聞きに宿の前から慌てていてパニックになりながらも宿の部屋を別にとり話し合ひの場所を移すことに成功した。

本来であればこちらがうかがうべき立場であるのだがどのような緊急の要件でこちらを訪ねてきたのか内心はビクブルであったが表には何とか出さずに会談することができたが…：できたのだがあまりにも阿呆っぽい惚気に満ちたものだった。

大公殿下が7月にお披露目予定のヒルダガルデー号機よりも早くに個人的な贈り物として式典用のドレスに合わせて装飾品^{アクセサリ}をサプライズで送りたい、同じ女性で魔道具関係に詳しいであろう鍊金術師^{アルケミスト}（魔道具製造を主とした発明家を一括して総称したものが^Fこの世界基準の鍊金術師らしい）として最近有名になってきた私に極秘裏に依頼したい

とのことだった。

装飾品作りアクセサリーに手を出した覚えは無いし、第一に大公夫婦のお眼鏡にかなうものが作れるわけがないとお断り（もちろん遠回しに懇切丁寧に無礼にならない程度に）したのが妙に大公殿下は食い下がる。

詳しく聞いてみるとどうやら飛行テストの時に小型艇を飛ばしていた私の髪をまともアクセサリーめていた装飾品がキラキラと赤い燐光を発しながら目に見える火の魔素エレメント飛ばしていたのは城の窓からはつきりと大公夫人付きの侍女メイドが目撃していたのだそうだ。

あの目に見える程の火の魔素エレメントを飛ばして周囲（この場合は大公夫人付きの侍女たち）を魅了してやまないほどのもので噂がやむことがないとあれば大公夫人もアレメイドに興味を持つというものだ。

そういうわけで普段は関わることの少ない夫（大公殿下）の方にアレはいつたい何なのかという話が壮大になってしまい秘密裏の装飾品作成依頼につながったというわけだ。

大公殿下のブリ虫呪いの事件に巻き込まれる兆フラグしかと身構えたがどうやら全く関係

ない私を指名した依頼の話（アレは装飾品アクセサリーではなく防具と説明したうえで了承を貰い指名依頼を受諾した）であったからよかったもののこの後気晴らしのため工場区の視察に伴われてまた別の意味で冷や汗（大公夫婦の惚気話にどんな反応しろと）を流す羽目になった。

仲良きことは美しきかな…だが独り身の非リア充に惚気は毒だわ。

第33話

納得のいく物が出来上がるまでには色々失敗話が付き物だが一発で成功が望ましい。

大公夫人に似合いの簪を制作しろとのご依頼、軽く日常的にも付け易い木製の物で黒檀と白木で2種類と元となる簪本体の部分、ビショップ家の伝手で合成屋から金や銀の細かな金具の注文、あとは魔力を込めて防具としての効果を高める薬品と宝石を何とか集めることに成功した。

デザイン候補もいくつか書き留めており、百合や薔薇などの定番、変わったもので苺の花のほかにこちらにはない花のデザインで椿や桜をモチーフにしたものなど、そのほかに一般的にこちらでは見かけない昆虫(殆どが魔物化するため滅多に小型のものは外では見かけない)であるムラサキシジミやモルフォ、アゲハ蝶のデザインなどを城の上級兵士さん経由で大公夫婦にリンドブルムの合成屋に工房をお借りして作り上げた試作品に紫水晶アメジストで作られた小さな董タケノコが連なりミニブーケのように見える銀の簪と共に送ったデザイン案を送りひと時の休息となった。

デザイン案を送ったが肝心の効果の方も込めることは忘れていないこの世界の宝石はある一定の魔力と熱を込めると液状化し、術者の想像通りに形を変えるため（ただし適正者は少ない）にある程度融通が利く。

液状化した紫水晶アメジストに上級回復薬ハイポシオンと一定の割合で配合することで個体指定の初級回復術ケの効果を1回限りで得られるものだ。

久方ぶりの細かい錬成作業は個人に売り物の試作品となるものを送るとあつてなかなかに神経を使い疲れた。

以前の珊瑚の簪は貰った珊瑚をそのままの形で加工処理することで見ごたえのある枝ぶりを保ったまま簪にするという一人では欠けさせるのが目に見えていたためビショップ家の職人に手伝ってもらつてようやくできたものだ。

それがリンドブルム工房はウエインさんが武器に偏った合成の腕なのでトーレスさんに手伝ってもらつたが今回はほぼ全部工程を一人でやったために作成依頼を受けて1週間ほど試作品の製作に時間を取られてしまった。

毎度のことながら計画性を持たない行き当たりばつたりの性格が憎いことこの上ない7月のお披露目にデザインの決定の知らせ次第でぎりぎりの納期となつてしまいうだ。

まあ…、そうならないようにいくつかの部品パーツを作り上げておくことで残りの注文され

たデザインを組み合わせるだけにして時間短縮にはなるはずだ。
7月まで残り20日ほどだがどうなることやら…。

第34話

ここまで時間がかかるとは……まだ手にはけなきやいけない部分が山ほどあるのだが。

デザインが決まった。

ヒルダガルデ大公夫人が選んだのは菖蒲アイリスのデザインだ。

前にブローチのデザインで菖蒲アイリスが漫画で使われていたのでふと思いつきで描いたデザインが選ばれたようだ。

すでに部品のほとんどが仕上がっているので後は菖蒲アイリスの花部分を仕上げていくこととした。

リンドブルムの合成屋の工房をお借りして1日目。

鼻と口を覆う口布型マスクに耐熱エプロンとグローブに身を包み完全装備でいざ挑む。

安く手に入れた多くの品質は良いが何らかの形で傷物となった紫水晶アメジストを大量にそしてエリクサーを3つ分を惜しげもなく投入後、適量の魔力を注ぎ入れると同時に火を適

温にとどめるとドロリと炉の中で溶ける己の魔力に確かな感觸（直接觸つてはいないが）と共に操作することで混ざり合い花の形へと生まれ変わるのを感じた。

菖蒲アイリスの形に成形した基礎となるものを念力で取り出し冷やし固めるため特殊な薬液に満ちた壺の中に静かに沈めていくと熱で薬液が蒸発していく、冷えて形となるまで割れるかどうかは判らないがさらに手を加える為に窯の傍に設置された宝石用の炉に向き直る。

残りの炉の中の紫水晶アメジストにとある粉状になった鉄粉をほんの少量加えた。

紫水晶アメジストに熱を加えてある一定の配合で鉄粉を加えるとこの世界では黄水晶シトリンへと人工的に作り替えることができるのだ。

ただこの黄水晶シトリンは扱いが難しく技能習得においては全く役に立たないし、宝石そのものであるために能力値の上昇も見込めない代物なのだ。

故に黄水晶シトリンは低価格の人工宝石の一種として宝石商間では叩売りの値段で扱われてしまうのだが、今回はそんな黄水晶シトリンに魔力を大量に許容量限界ギリギリを見極めて（失敗すれば炉が割れて大爆発なんて惨事で済めばかわいい方なのだ）籠めていく。

黄水晶シトリンは人工宝石として作り出せる物としては魔力許容量は中々の大ききなのが最大の特徴で、技能アビリティに枠を取られないため魔力に反発を覚えずに術を込めることがたやすいのだ。

これを核として術式を込めていく。

基礎の部分の紫水晶アメジストに魔力を込めて術式を込めても初級回復術ケアしか籠められなかった前回の試作品の時と比べても滑らかに魔力に反発を覚えず術式を書き込めることに味を占めいささか手を加え過ぎたのか炉の中で黄水晶シトルリンが揺らぐ気配がした。

急いで炉から念力で持って取り出し菖蒲アイリスの花の基礎を薬液から取り出し接着していく、冷えて固まりちらりと全体にひびや割れがない事に確認するとまた静かに新たな薬液をつぎ足しながら壺に沈めていく。

この作業に丸一日を使い果たし合成屋の一室をお借りして熱で蒸発していく薬液を注ぎ足す作業で2日ばかりで菖蒲アイリスの花は完成した。

第35話

更にひと手間欠けて完成度を上げなくては…商品に価値をつける職人は大変だな。

飾りの主となる紫水晶に黄水晶が鮮やかなコントラストを見せる菖蒲の花がようやく完成した。

正直に言うのと割れずに花が作れた事は奇跡に近いしもう一度作れと言われても二度と同じものはできないから真正銘世界で一点物の菖蒲の簪になるだろう。

暗い所であれば紫水晶が籠められた魔力によって蛍の光に似た淡い幻想的な紫の光を放ち出力機としての役割を担う黄水晶から複雑な魔術式で持つて描かれた文様がキラキラと輝くのは見た目的にも満足のいく品になったと思う。

自動発動条件に装備者の致命傷を設定した為に任意での発動は出来なくなってしまうが籠めた魔力と魔術式により全回復蘇生魔法の効果を封じ込めることに成功したからその代償なのだろう。

任意発動条件の設定までの技術を私が持つていないからともいうが：気にしても仕方ないし、その代わり試作品の簪と違い使った後に魔力を籠め直すことでまた再利用可能なので頭部装備としての耐久力もあるはずだ。

まあ：試作品との違いは1回きりの使い切りの魔法具マジックアイテムから魔力を籠め直すことでまた使えることと防御力が上がったことくらいだろうか。

それでもこの世界でも裏に回ればボムのかけら等の怪しい魔法具マジックアイテムはあるのだが試作品と同じように1回きりの使い切りタイプが多いし何よりも私の作るものとの違いが効力が安定していないのだ。

物品であれば習得していない魔法でも特定の魔術式を込めることで発動することは容易であるために自作物の怪しい品マジックアイテムがピンキリで存在している。

それに比べればこの上ない魔法具マジックアイテムなのだからこれ以上は高望みだと私は思うし、むしろ花の部分に籠めた自動発動術式や繰り返し使える事さえもだいぶオーパーツギリギリの代物だからやりすぎたかもしれない。

さて、依頼の簪についてだがあとは組み立てる作業を残して日数に余裕があるため付加価値を高めるための簪部分のデザインの参考になるものがないかリンドブルムの街を散策しながら羽を伸ばそうと思う。

これからの作業は火を使った大掛かりなものはないし、宿の室内でもできる内職のような組み立て作業のみなので、決してサボリではないし日数に余裕もあるからの行動だと言いついておこうか。

3日ほど作業のため合成屋の一室を借りて寝泊まりしながらの作業であったために久々のリンドブルム商業区の日差しはすっかり初夏の気候に変わっていた6月の半ば近い為に当然ではあるのだがそろそろ衣替えの季節だ。

着ている服もロングのワイシャツでは暑いので古着屋で夏物の服を複数買うことをこの日の目標とした。

第36話

買い物に無駄なものは付きものだし、特に気分転換の買い物は、だ。

リンドブルムの商業区は探せば見つからぬものなどないと言われるほどに商品の集まる市場が月に何回かあるのだが、その理由はリンドブルムが誇る飛行船による貿易による積み荷の卸しが一挙に集まる行われる日とその正体なのだ。

この日もちようどその時期に当たったらしく、商業区のうちこちらが様々な種類の生鮮や保存のきく食べ物、衣類や反物、貴金属に小物など数えたらキリがない程に個人の出店や大店の商品がたまりと並べられ華やかな賑わいを見せていた。

合成屋を出てから市場の広報を聞き目当ての夏物の服を目指して歩いていく。

祭りのように感じられるほどの熱気に売り買いの注文や値引き交渉で周りは忙しいし、個人の出店の一部はその場で食べられるスープや串焼き、揚げ物が美味しい匂いを漂わせている。

市場の入り口近くの出店では揚げ物が売られており中をのぞくと、贅沢に使われた油の中でパチパチと音をたてて粗めのパン粉に包まれた丸いモノが泳ぎ段々と綺麗なキツネ色に変わっていくあらためて店の看板を見るとそこにはコロツケと書かれていた。

油紙を包まれた真ん丸型のもが先にいた赤魔導士のカップルに手渡されていた。

寄り道も買ひ物の醍醐味であるし、何よりも三日間の合成屋での寝泊まりで食事にボリュームのある揚げ物は出てくるわけもなく（そもそも急に合成屋の一室を借りれただけでも儲けものだ）朝からがつつりと食べることもなかったからコロツケを2つ注文した。

ソースがないためやや味気ないがそれに変わつての添えられたレモンが変わりにいい感じの酸味でコロツケの油をサツパリとさせている、がっぷりとかじりつけば馬鈴薯ジャガイモにひき肉と玉ねぎがいい味を出しているので食いごたえも十分のものだ。

追加で3つコロツケを買い足して次の店を覗き込むとクレープに似た薄い生地にソーセージを4つ四方に土手の様に囲いになるように置き、その真ん中にチーズをたっぷり目玉焼きになるように落とされた卵が美味しそうな料理を見つけた。

初めて見た料理だがガレットと書かれた看板を見た事で納得がいった、作ったことはないがそば粉で作られるクレープの親戚のような料理だったはずだし、目の前のガレットは中々に美味しそうなので一つ注文して食べてみた。

トロリと解けたチーズが程より塩味で卵の半熟加減とマッチしている土手となったソーセージもパリッとした粗挽き肉が美味しく軽くお酒が恋しくなるほどだ。

こうした食べ歩きも久しく感じる程に切迫していたのだなど、さつそく近くの店からお酒をかうとしみじみと酒の味をかみしめた。

第37話

この世界で一つ故郷で悩んでいたことが解決したことがある。

私は食べることが結構好きなのだ。

自分の料理を作ることでもあれば観光地に行くと珍味や名産品を買って食べることでも好きなのだ。胃の容量が小さいのか作っても量を食えることができずに保存するか泣く泣く友人たちにおすそ分けするしかない。

この世界に来てからというものの燃費が悪くなったのかコンビニの弁当一つで満腹になるどころか残しかけるはずの私が食べたものが端から魔力に変換されるのか油断すると空腹に悩まされることが多くペロりとフルコースを平らげたりもするから不思議なものだ。

食べるものも食べたのでお目当ての夏物が手に入りそうな場所に行くことにした。

宿への道は寄り道交じりによった市場で大体の物を買うことができた。

桜のような花弁はなびらのアクセントの付いた上品なワンピースに日焼け防止の長手袋が3

組、其れと夏物のシャツが2つでしめて4800ギルほどの買い物となったが、古着にしてはあまり着られていないのか黄ばみとかは見られなかったものでそれで妥協して買
い求めたので値段を取められた。

宿に戻った後は自室で細かい作業に向かうべく、日が差し込む窓からの眺めに目を休
めながら簪の残りを仕上げていった。

大公夫人の髪は淡い色合いなので黒檀を主軸に宝石の取り付け、黒檀の色合いだけで
は寂しいので引き立てるために細かな雲母クラムを施すと黒檀そのままの時とは見違えるよ
うに立派なものとなった。

出来上がりに満足した私は包装用に使わなかつた白木余で木製のちようどよい箱を作
り、緩衝材を詰めて白絹の手布巾ハンカチで覆った完成した簪を詰め込んだ。

あとはシド大公に渡すことで依頼は無事終了といったところだろうが詰めた箱に
ちよつとしたお呪いまじなをかけておくことにした。

もし大公殿下シド大公浮気浮気未遂未遂の場合、家出する大公夫人の為に同じ女性とし
て長期間の監禁生活は精神的負担ストレスが過ぎるので少しでも減るようちよつとした保険
をかけておくことにした。

この術が役に立つという時は運命ストーリーの進行に一つの波紋を起こすことに成功するとい
うことだが、果たして運命はそううまくいくかは時がくるまで私自身にもわからない。

彼らには悪いが初めは運命ストーリーの進行通りに進んでもらった方が都合がいい。

私は運命ものがたりのとうじょうじんぶつの奴隷にはなりたくないのだがそんなことは言つてられない事情というものが最近出来てきた。

世界移動の魔法実験の際どこかしらから視線のようなものを感じるようになった。

なんせ魔法を使つてこの世界から移動する際に毎度何時ラスボスの一角に鉢合わせするのかひやひやするこの身としては安全に世界移動魔法の開発も神経質にならざる負えない。

帰還については確固たる私の意志だが私がここにいて波紋は起こるものだ。

ゆえにその波紋で何が起こるかはわからないが心構えだけはしておこう。